

研究開発課題

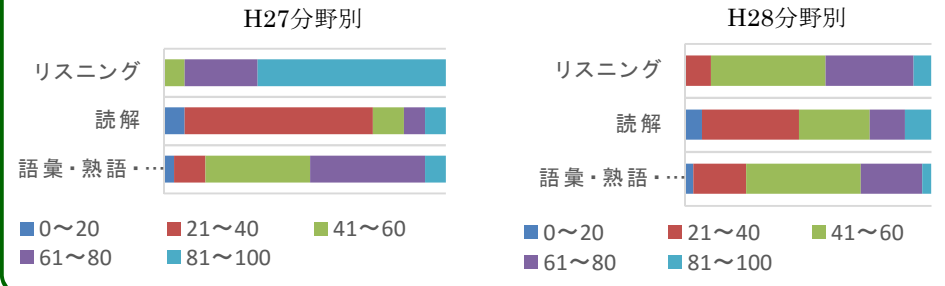
- ・小学校高学年における教科化に向けた指導と評価の考察
- ・CAN-DOリストの形での学習到達目標を明確化し、英語による言語活動を多く設定したカリキュラムの考察

取組の内容

- 小学校第3、4学年の外国語活動型、第5、6学年の教科型の学習内容及び評価の研究
- 中学校・高等学校の目標及び内容の高度化を踏まえた小・中・高等学校10年間の系統性のあるシラバスの作成とCAN-DOリストを生かした評価や評価方法の研究
- CAN-DOリストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるように独自教材の開発・作成

成果③

◎高いリスニング能力が身に付いている。
 (中学1年生の分野別・年度別の英検IBAの比較)
*横軸は生徒の占める割合を表している。



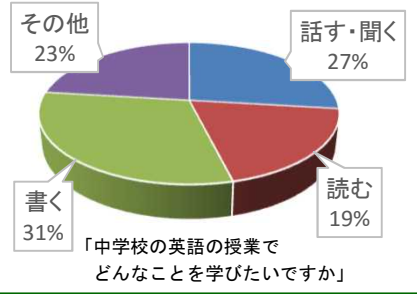
生徒が変わっても、リスニング能力がよく身に付いている。

成果①

- ◎各校種において、小・中・高等学校10年間の系統性のある指導計画及びCAN-DOリストの作成を通して、発達の段階に応じた指導を行うことができるようになった。
- ・CAN-DOリストに対応した言語活動を工夫することで、授業改善につながった。
- ・CAN-DOリストを児童生徒に示すことで、児童生徒が自己評価をしながら学習を進めることができた。

成果②

◎中学校入学時のアンケートで、英作文に取り組みたいと答える生徒が多く、実際に取り組んだ英作文でも、過年度と比較し、使用語彙数、文数が充実した作文を書く生徒が増えた。



研究の成果と課題

小学校から外国語活動、英語科を受けた生徒のリスニング能力が高く、中学校入学時のアルファベット大文字・小文字を書く問題も正答率が高い。
 CAN-DOリストは、単元のゴールにつながる各時間の目標や内容を設定したことで、着実に児童生徒の言語能力の育成を図ることができた。また、教師として身に付けさせたい目標が明確になった。
 今後もCAN-DOリストの改善、活用方法等の検証が必要である。また、動くCAN-DO(学習到達目標を実現している児童生徒の姿を動画で記録したもの)も完成させなければならない。

研究開発課題

小・中・高を通じた英語教育の抜本的充実に向け、小学校英語教育の先進的な取組について試行し、その成果と課題を検証するとともに、小学校英語教育を踏まえた中学校、高等学校における教育課程及び指導方法を開発する。

取組内容

取組①

- ・小学校における効果的な短時間学習の実施
3・4年生・・・年35単位時間(週1コマ45分)
【活動型「話す」「聞く」の音声中心指導】
- 5・6年生・・・年70単位時間(週1コマ45分+15分×105回の短時間学習を関連付けた指導の在り方)
【教科型「話す」「聞く」+初歩的な「読む」「書く」】

取組②

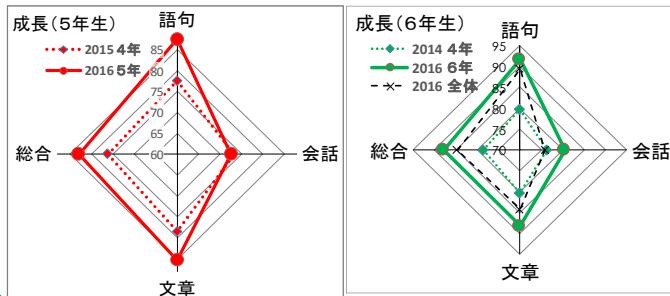
- ・小・中・高一貫した紫波町独自の学習到達目標(CAN-DOリスト)を活用した指導・評価
- ・「英語を使って何ができるようになるか」の視点から、5領域の学習到達目標を設定
- ・年4回の公開授業研修会を実施し、PDCAサイクルで指導改善に取り組む。

取組③

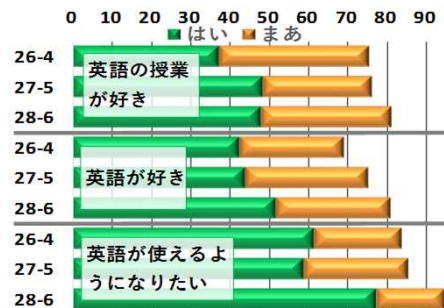
- ・(取組②と関連して)児童が「英語で何ができるようになったか」を図るためのパフォーマンステストを各学期において実施
- ・ルーブリックを設定した評価の実践
- ・質問紙調査及び外部試験データによる検証

成果① ◎児童の英語力が向上

☆学年が進むにつれ確実に英語力が向上
(英検Jr. Bronze テスト 学校版)



成果② ◎英語の学習を肯定的に捉える児童が増加



成果③ ◎生徒の英語力が向上

☆中3の英検3級以上合格者数が増加
(29.12.1現在)

	H26	H27	H28	H29
【2級】	0	0	0	2
【準2級】	5	8	16	11
【3級】	45	30	64	64

小学校で教科としての英語学習を経験した学年は、英語の音声や文字に十分慣れ親しんでいるため、英語を主体的に学習できる生徒が多い。

研究の成果と課題

小学校中学年から外国語活動、高学年で外国語科として、「聞くこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」、「読むこと」、「書くこと」の各領域の学習到達目標に基づいた活動を行わせ、その定着度や達成度をパフォーマンス評価で測ることにより児童の英語力及び学習意欲等を向上することができた。また、小学校段階から初歩的な文字指導を行い、小学校と中学校の言語活動につながりを持たせたことで、第1学年における英語学習のつまずきが軽減され、その後の英語学習におけるモチベーションの持続につながった。小学校高学年においては、短時間学習と45分授業のつながりに配慮した単元づくりに取り組み、紫波町独自のスタイルを確立することができた。評価については、今後も新学習指導要領に合わせた学習到達目標の改善とそれに合わせた評価方法の工夫及びパフォーマンス評価の妥当性の検証が必要である。中・高等学校においては、CAN-DOリストの明示により生徒自身が到達目標を理解し、各自の英語力の伸びを確認しながら学習を進めることができていたが、高等学校においては、地域の情報を英語で発信するなど、今後より実態に応じた言語活動、発信能力を高める活動の工夫が必要である。

研究開発課題

児童生徒の英語コミュニケーション能力の育成を目的とした、小・中・高一貫した系統的な指導方法及びそのための教育課程編成、教材及び評価方法の開発

取組内容

取組①

- 【小学校におけるカリキュラム・マネジメント】
- ・全校での23分の短時間学習の実施(高:70単位時間、中:35単位時間)
 - ・基本的に全て英語で行う授業(担任+ALT)
 - ・担任を支える指導体制づくり

取組②

- 【小・中・高一貫したCAN-DOリストの活用】
- ・小・中、中・高の接続を明確にした学習到達目標リストの作成、活用及び改善
 - ・単元目標とCAN-DOリストの関連の明確化

取組③

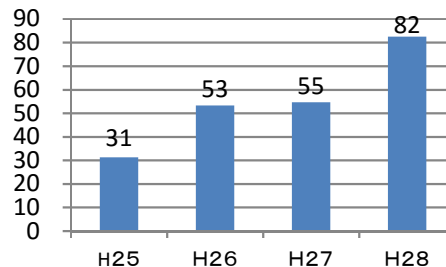
- 【小・中・高一貫した授業スタイルの実施】
- ・小1から高3まで全て英語で行う授業
 - ・秋田の「探求型授業スタイル」の共通実践(見通しを持つ→自分の考えを持つ→ペア・グループで話し合う→学習を振り返る)

成果① 児童の英語力の向上(由利小学校)
TOEFL Primaryの結果(青:below A1,赤:A1,緑:A2)



成果② 生徒の英語力の向上

英検準2級以上相当の力を有する生徒の割合(由利高校 英語教育実施状況調査)



成果③ 小・中・高一貫した英語教育の推進

- ・小学校では全て英語で行う授業が展開され、その結果、特に児童のリスニングとスピーキングの能力が大きく向上した。
- ・小学校で教科型を経験した児童は中学校でも高い外国語学習への意欲を保持できている。
- ・高等学校での生徒の言語活動量が増加し、コミュニケーション能力が向上している。
- ・小・中・高が連携し、一貫した学習到達目標の設定や接続に配慮した授業スタイルの実施に取り組んだ。大学の協力も得て、県として共通理解を図り英語教育を推進することができた。

研究の成果と課題

拠点地域の小・中・高それぞれ一校を研究指定校とし、学習到達目標に基づき小・中・高一貫した英語教育の推進を図った。小学校では、中・高への接続を意識し、小学校1年生から全て英語で行う授業に全校一丸となって取り組んだ。また、毎月1回、担当者会議を開催し、小・中・高の共通理解を図るとともに、本県の小・中学校が共通して取り組んでいる「秋田の探求型授業スタイル」を高等学校においても取り入れた。これらの成果は公開研究会や研究発表を通して当該市をはじめ全県へ波及された。この四年間で、児童生徒の外国語学習に対する意欲、外部検定試験の合格率や教員の英語使用量、生徒の言語活動量が大きく向上した。今後、小学校においては、教科における評価の研究、中・高等学校においては、生徒の言語内容の高度化について更なる研究が求められる。

研究開発課題

郷土鶴岡の良さを世界に発信できる確かな英語力を育むために、小学校第3学年から英語教育を開始するための教育課程、教材及び指導・評価方法並びに、小中高10年間の系統性ある指導と郷土学習の進め方について研究開発を行う。

取組内容

取組① 小中高で指導をつなぐ

- ・小学校3・4年生で外国語活動(年間35時間)、5・6年生で外国語(年間70時間)の実施
- ・10年間を見通した指導方法の研究とCAN-DOリストの作成による評価の工夫を通じた授業改善

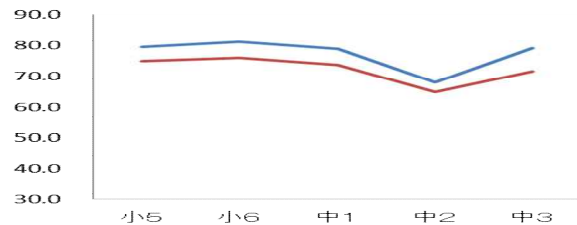
取組② 英語学習と郷土学習をつなぐ

- ・郷土学習を生かし、身近な内容を言語活動に取り入れた英語学習の工夫
- ・鶴岡の魅力を英語で発信する、校種や学年に応じた活動の工夫

取組③ 異学年の児童生徒をつなぐ

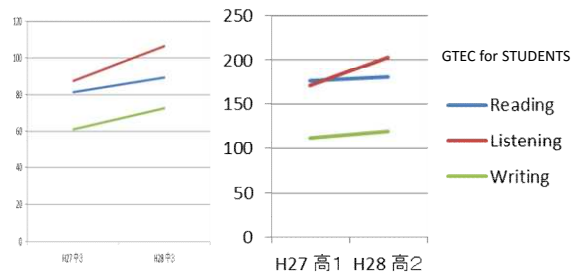
- ・小・中・高校生合同でのイングリッシュ・キャンプの実施
- ・高校生による小学校の外国語活動の授業への訪問

成果① 児童生徒の英語でのコミュニケーションに対する積極性が高い



■わからない所があっても英語を理解しようとする子どもの割合
 ■わからない表現があっても英語で表現しようとする子どもの割合
 ※児童生徒対象のアンケート調査より

成果② 生徒の英語力が向上した



中学校: H27とH28で中学3年生のスコアが大きく上昇
 高校: 特にリスニングのスコアが大きく上昇

成果③ 教員の授業改善の意識が高まった

○指導性との実態を考慮した目標や活動の工夫を行っている教員の割合の増加(%)

	小学校	中学校	高校
事業開始前	38.1	40.0	70.6
事業実施後	97.6	100.0	76.5

○CAN-DOリストを活用して単元計画や言語活動を工夫する教員の割合の増加(%)

	小学校	中学校	高校
事業開始前	4.8	20.0	47.1
事業実施後	90.5	100.0	58.8

※教員対象アンケート調査より

研究の成果と課題

小・中・高の系統的な指導を目指し、共通のCAN-DOリストを作成することにより、どの学校でも目指す児童生徒の姿をもとに単元計画を立て、授業改善に取り組むことができた。郷土学習を取り入れて授業を組み立てることを意識したことは、児童生徒の興味・関心を大切にした言語活動の工夫につながり、高等学校においては英語を使っての社会に開いた活動へとつながった。異年齢の児童生徒が共に学機会をつくることで、英語学習への意欲の向上が見られた。小学校における外国語科の評価や、中学校、高等学校での生徒との学習到達目標の共有による自己評価力の向上には課題が残っており、今後より意識的な取組と研究が必要である。

研究開発課題

児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成を目指して、小学校の早期化・教科化に向けた教育課程、指導法、指導体制の在り方及び小学校の教育課程の改善を踏まえた、中・高等学校の高度化に向けた指導法の改善について、研究開発を行う。

取組内容

取組① 県内全域における事業の展開

- ・ 文部科学省指定 3 地域
前橋(中部)、嬬恋(吾妻)、沼田(利根)
- ・ 県教委指定 2 地域
高崎(西部)、太田(東部)
- 研究成果を効果的に県内全域に普及

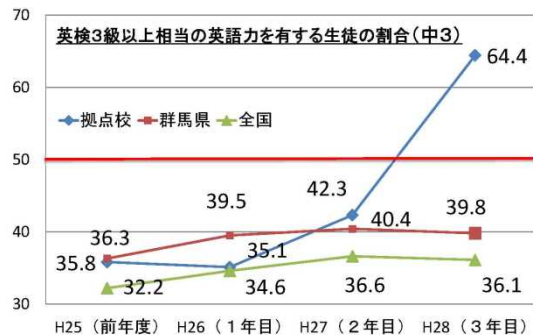
取組② 群馬県版英語教育カリキュラムの開発

- ・ カリキュラム開発チーム(総合教育センター)による指導計画、指導資料、映像・音声教材の開発と全県への配付
- 拠点校の研究推進ならびに各学校における授業づくりや校内研修をサポート

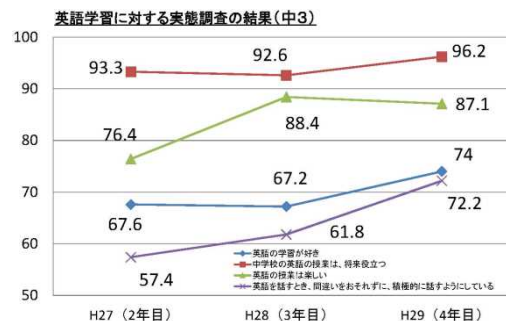
取組③ 拠点校の公開授業を活用した教員研修の実施

- ・ 小中学校において、英語教育推進の中核となる教員を対象とした研修の実施
- 公開授業等を通じた実践的な研修を実施し、英語指導の中核となる教員を育成

成果① 児童生徒の英語力の向上



成果② 児童生徒の英語学習に対する意識の高まり



成果③ 校内の指導体制、教員の英語指導力の充実

- 【拠点校】
- 校内全体で英語の授業に取り組む体制ができている(小学校) …88.0%(H28:69.8%)
 - 英語の授業を楽しんでいる(小学校) …88.0%(H28:83.0%)
 - 定期テスト等の作成の際に、出題内容や形式等について、英語担当教員で共通理解を図っている(中学校) …88.3%(H28:61.1%/H27:44.5%)
- 【県内】
- 拠点校の公開授業等への参加人数 (H28～29) …のべ3,285人
 - 英語指導に関する校内研修の実施回数(小学校) …年12回以上 29校/11回～3回 126校

研究の成果と課題

研究を進めるに当たって、群馬県英語教育連絡協議会を組織し、文部科学省指定の3地域と県教育委員会指定の2地域における研究内容に関して、担当者間で詳細にわたって、共通理解を図り、全県一致の英語教育の推進が図れるようにした。これまでに、拠点校の取組を公開授業等を通じて、県内に公表し、指導法や指導体制の在り方など、群馬県が目指す各学校段階の英語授業のモデルを示すことができています。また、群馬県総合教育センターとの連携により、拠点事業の研究開発と教員研修とを密接に関連づけることで、その成果を、各校で英語指導の中核となり、実際に指導に当たる先生方に対して還元することができたと考えています。

課題としては、拠点校では「児童生徒の英語によるコミュニケーション能力」や「英語学習に対する意識」が目標とするゴールにほぼ達していると言えるが、県全体としては、まだ達していないことがあげられる。今後、拠点事業の成果をさらに検証するとともに、各学校における英語指導を一層充実させ、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を高めていくための具体的な取組を実施していく必要があると考えている。

研究開発課題

小学校で英語教育が早期化・教科化された場合の中学校、高等学校での英語教育の在り方

取組内容

取組①

- 教育課程の研究開発
 - ・ 中学年 年間35時間を「活動型」を実施
 - ・ 高学年 年間35時間、週1コマを「教科型」、1コマをモジュール(短時間学習) 9分×5日(年間35時間)として実施
- 短時間学習の指導計画作成

取組②

- 評価の基本的な考え方の確立
- 教科の特性を考えた評価方法の検討
- 評価方法・評価の場の設定
- Can-Doリストの作成
- 自己評価シートの検討
- 文字認識評価シートの作成

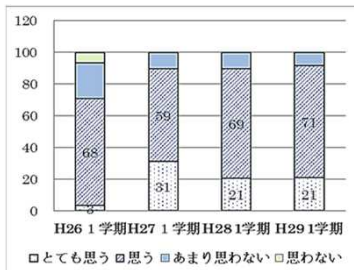
取組③

- 新たな指導用教材・研修資料の整備
 - ・ 1時間の指導過程に即したクラスルームイングリッシュシートの作成
 - ・ 読むこと(ストーリーテリングなど)、書くこと(モジュールシートなど)の教材の開発
 - ・ 小中一貫した教材開発(一・二人称・現在形・過去形・郷土の素材を生かした内容を含む)

成果①

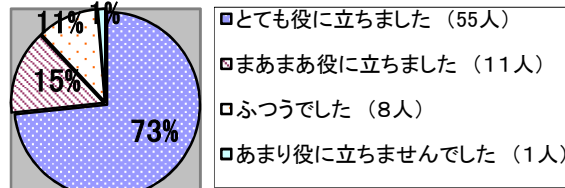
教員の英語教育への積極性の向上

・授業に積極的に取り組んでいるか」という質問に対して「とても思う」または「思う」と答えた職員の割合は、年々増加し、平成29年度は92%の教師が積極的に取り組んでいると回答している。
校内研修や授業研究会の積み重ねにより、授業に対する意識が前向きに変化したことがわかる。



成果②

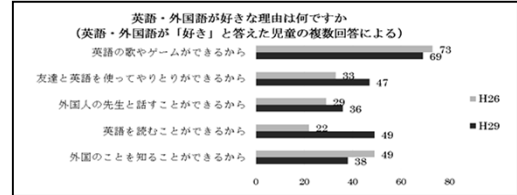
音と文字の関係の習得について(フォニックス)



2年間フォニックスの学習をしてきた現中学1年生の生徒を対象に、フォニックスの学習が中学校の「読む」「書く」学習に役立っているかというアンケートから小学生の段階で英語の文字と音の関係を学ぶことは、中学校で学ぶ英語の学習を理解する大きな力となっていることが分かった。

成果③

児童の「読む」に対する意識の向上



「英語・外国語が好きな理由は何ですか」に対して「英語を読むことができるから」と回答した児童が、平成26年度の倍に伸びており、本研究で行ってきた「ストーリーテリング」や高学年での教科化による「読む」活動の成果であると捉えている。

研究の成果と課題

- 「聞くこと」を大事にした授業改革を行っていくことで、小学校において週2時間程度の英語授業であっても、英語に対する力が育成されつつある。
- 中学校区を基盤とした研究授業を市内全小学校で実施した。そのことにより、市内の教員の英語教育に対する意識が高まった。また、小中連携の観点からも大きな成果となった。
- 研究校を含む市内の英語教育に係る合同研修会を2回、講師を招き開催した。ワークショップ形式で教師の発音についての研修会では、教員のクラスルームイングリッシュの使用率の上昇や発音に不安を感じている教員の不安解消にもつながった。今後は更に多くの教員が自信をもって授業に臨めるよう「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」などの資料の活用を図ってきたい。
- パフォーマンス評価などにより、4技能の適切な評価に向けた改善への取り組みが進んでいる。
- △ CAN-DOリストの整備と、それに合わせた評価方法やパフォーマンステストによる評価についてはさらに検証が必要である。
- △ 主体的な英語学習者を育てるための数値による、評価内容・方法の工夫・改善を図る。

平成26年度～平成29年度 外国語(英語)教育強化地域拠点事業 最終報告 千葉県

研究開発課題

自らの意見を述べ、自国の文化や特徴を語ることのできる能力の育成を目指して、英語教育の実施学年の早期化及び教科化に基づいた小中高等学校の系統性のある教育課程及び評価方法の研究開発

取組内容

取組①

・小学校中学年では、音声中心の実践による研究、高学年では、流山市が作成した『流山市英語プログラム』を使用し、英語科としての教材の有用性、指導方法と評価方法についての研究

取組②

・即興性を養う活動を取り入れるなど、学習内容・目標の高度化についての実践研究
・CAN-DOリストを活用したパフォーマンステストの実施

取組③

・小中高で連携の取れた英語教育のための公開授業、講演会、担当者会議の実施
・高校生または教員による小中学生への授業実践

成果①

◎英語でコミュニケーションをとることに自信がついた
『英語(外国語)学習に関する意識調査』において「外国人が困っていたら、あなたはどうしますか」との質問に「英語で話しかける」と回答した児童・生徒は、どの学年においても向上。

	H26 (3年)	H27 (4年)	H28 (5年)	H29 (6年)
英語の授業が好き	89%	92%	85%	87%
英語で話しかける	48%	63%	62%	64%

成果②

○英語を使う習慣獲得

・英語を話すことへの抵抗感がなくなり、失敗を恐れず自分の言葉で積極的に自然なコミュニケーションを図れるようになった。
・インタビューテストやプレゼンテーションを授業に取り入れて、実際に英語を使うことで、相手に伝わりやすい方法を工夫するなど意欲的な態度につながった。

成果③

○英語力の向上

(中学)正答率(4級Lv以上)

	4級 Lv	4級 Lv以上	3級 Lv	3級 Lv以上
H26(中1)	22.5%	20.4%		
H27(中2)	32.8%	34.8%		
H28(中3)	29.5%		32.8%	21.3%

(高等学校)英検の合格率

H27年度 総受験者数254名合格者56名(合格率22%)

H28年度 総受験者数210名合格者72名(合格率34%)

研究の成果と課題

・連携には、異校種間での対話が最も重要であり、対話をする中で、共通点や系統性が見えてくる。それこそが、小中高等学校の円滑な接続の第一歩であることがわかった。
・指導者の英語力をさらに高める必要がある。中学校・高等学校では、専門性を有した指導者として、今後、早期に英語学習をはじめた生徒と向き合い、英語話者としてのモデルを示していかなければならないと考える。

研究開発課題

小学校中学年の活動型授業及び高学年の教科型授業を効果的に行うための教育課程の改善、小・中・高等学校の円滑な接続に向けた指導方法・教材、評価方法を研究開発し、児童・生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上を図る。

取組内容

取組①

小学校でのカリキュラム・マネジメント

- 3・4年生 35単位時間 (週1コマ45分)
【活動型「話す」「聞く」の音声中心】
- 5・6年生 70単位時間 (週2コマ45分+短時間学習15分×105回・36回)
【教科型「聞く」「読む」「話す」「書く」】

取組②

小・中・高等学校一貫した目標の設定及び評価の工夫

- 「英語を使って何ができるようになるか」の視点から、一貫した学習到達目標を設定
- パフォーマンステストの導入
- PDCAサイクルに基づいた授業改善

取組③

英語によるコミュニケーション能力及び英語力の向上

- 中学校：英語による授業、パフォーマンス課題の設定
- 高等学校：高度な言語活動の実施

成果①

平成29年度は、荒川区及び武蔵村山市において、15分間のモジュール学習を含む、5・6年教科型授業の70時間実施及び3・4年活動型35時間実施することができた。また、都が指定する英語教育推進地域と合わせ、拠点校での実践的研究及び検証の成果と課題を全都に周知することで、各地区において、移行期間に向けての準備・検討を進めることができた。加えて、東京都が行う教育研究員及び研究開発委員会と連携し、成果や課題を共有することで、各地区の中核教員による校内研修等に活用するなど、先行実施例として各学校に還元することができた。

成果②

平成27年度に都内全公立中学校向けに作成・配布した「パフォーマンステスト実施の手引き」に加え、平成29年度は指導者用のDVDを作成・配布し、英語授業の改善を図った。小学校においても拠点地域等を中心に、平成28年度からパフォーマンステストを試行的に導入し検証するなど、評価についても実践的研究を行うことができた。都立高校については、平成25年度に「都立高校学力スタンダード」を策定し、生徒の学力、英語力向上に努めている。拠点校においては、小中学校の学習到達目標を踏まえたCAN-DOリストを設定し、評価に生かすことができた。

成果③

平成28年度の生徒の英語力は、高校生が*34.2%、中学生が47.1%であった。国が目指す50%には未到達であったが、都立高校では、都が指定するグローバル人材育成及び英語教育推進に係る指定校50校の取得平均は70%を超えており、更に高い目標値を設定すべき段階にある。また、教員の英語力については、高等学校が70.1%、中学が46.7%であった。教員の加配やJET-ALTの全校配置(高等学校)、教員研修の充実、外部検定試験受検補助等、本事業の取組を含め、英語教育改善に係る施策の成果によるものと考えられる。(*一部修正)

研究の成果と課題

〈小学校〉短時間学習の実践事例(年間指導計画、教材等)、「読むこと」・「書くこと」を入れた指導法の開発、外国語の学習に対する児童の意欲・態度面での変容、児童の英語力の向上等、成果を得た。今後、教員の英語力・指導力の更なる向上に向け、研修機会の拡大、教材等の支援を継続していく。

〈中学校・高等学校〉小学校における新しい英語教育の実践的研究を軸にし、都立高校と公立小中学校が連携して研究を重ねたことで、それぞれの取組状況を把握し、授業改善に生かすことができた。また、外部検定試験を活用し、生徒個々の4技能の英語力を測定することで、生徒の「聞く」「読む」「話す」「書く」の各技能及び総合的な英語力を把握し、指導改善につなげた。引き続き、4技能の総合的な指導と技能統合型の言語活動を重視した授業改善を推進し、英語によるコミュニケーション能力の向上及び生徒の英語力の向上を図っていく。

研究開発課題

小・中・高等学校を系統的につなぐ「横須賀市CAN-DO(WANT-TO-DO)リスト」(学習到達目標)を活用し指導と評価の改善を図ることや、相手意識と必然性のある言語活動を通して、児童生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。

取組内容

取組① カリキュラムマネジメント

・小学校でのカリキュラムマネジメント
1・2年生→10単位時間(月1コマ)【活動型】
3・4年生→35単位時間(週1コマ)【活動型】
5・6年生→70単位時間(週2コマ)【教科型】
新観点による評価の研究

取組② 指導と評価

・小中高等学校を一貫した「横須賀市CAN-DO(WANT-TO-DO)リスト」(学習到達目標)を活用した指導と評価
・「相手意識」と「必然性」のある言語活動によるコミュニケーション能力の育成

取組③ その他

・小学校での専科教員、学級担任、ALTの役割や指導体制の明確化
・タブレット端末やプレゼンテーション機器等のICTの効果的な活用
・パフォーマンステストの内容の精選

成果①◎外国語活動への肯定的な捉えや、コミュニケーションへの意識の向上が見られた

◆「外国語活動が好き」と回答した児童の割合(%)

H26	63.7
H28	74.4

◆「クラスの友だちや外国人の先生との活動が楽しい」と回答した児童の割合(%)

H26	70.8
H28	89.1

対象児童…小学校研究校(2校) 6年生

成果②◎中学校での学習の到達状況の成果が見られた

◆英検IBAによって3級以上のレベルと判定された生徒の割合(%)

準2級レベル以上	5.9
準2級レベル	17.1
3級レベル	50.0
3級レベル以上の合計	73.0

市内中学3年生の英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒の割合…約38%

対象…中学校研究校3年生(H28)

成果③◎小学校での学級担任、専科教員、ALTの役割・指導体制の明確化による授業実践の充実

・学級担任による学級の状況や児童の発達段階に合った授業の実践
・専科教員を中心とした6年間の系統性を持たせた指導計画の設計
・専科教員によるスモールステップを重視した書くことの指導の推進
・ALTによるコミュニケーション・モデルの提示や異文化理解

研究の成果と課題

小中高等学校を一貫した「横須賀市CAN-DO(WANT-TO-DO)リスト」によって目標を共有することで、学びの系統性が明確な授業が実践された。小学校で実践したことを中学校の授業につなげることで、生徒にも自信や系統性を感じさせることができたり、高校のパフォーマンステストの様子を見据えながら、小・中学校のパフォーマンステストの在り方を検討したりするなど、つながりのある指導を考える上での大きな基礎とすることができた。また、相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をキーワードとして小中高等学校が連携しあうことで、学びの系統性及び発達の段階に合わせた指導を深めることができた。今後は到達目標をより具体的に授業内容と結び付けたり、単元ごとの到達目標を見直したりし、めざす子どもの姿に迫っていくことが重要である。

研究開発課題

小中高一貫した学習到達目標に基づいた授業実践により、英語による豊かなコミュニケーション能力を育成する。また、評価の在り方を実践・研究し、児童・生徒の英語力の把握と指導方法の改善を図る。

取組内容

取組①

小中高一貫した学習到達目標を設定して指導目標の統一を図るとともに、評価方法を改善し、指導改善つなげるサイクルを構築する。

取組②

地元大学教員と県および市教委指導主事が統一した達成目標に基づき、定期的な学校訪問をすることで、地域で統一した指導改善を図る。

取組③

小中学校においては、市教委の指導のもと、校内研修のモデルを構築する。

成果①

- ・校種間の連携が密になり、互いの授業公開に参加することで、指導における校種間のギャップが解消された。
- ・中高においては、校内テストが改善され、知識重視の評価から、パフォーマンス重視の評価に少しずつ変化している。
- ・小学校においては、数字による評定の信頼度を高めるため、観察や振り返りシートによる丁寧な見とりが可能になった。

成果②

- ・中学校、高等学校では、「コミュニケーション重視」の指導観に基づき、「習得してから活用する授業」が「活用しながら習得する授業」に変化。英語の授業は英語で行うことが常態化した。(75%以上英語)
- ・小学校では、指導(練習)中心の授業が言語活動中心の授業に変化している。

成果③

- ・定期的な校内研修の開催が学校の文化として定着した。
- ・小学校では、担任の英語力と指導力が向上、担任主体の授業が可能になった。
- ・中学校では、他教科の教員も英語科の指導改善のための研究会に参加し、教科を問わない指導改善のための交流が定着しつつあり、同僚性が向上した。

研究の成果と課題

成果

- 小中高のすべての校種で、「コミュニケーション重視の授業＝言語活動を通して英語力を向上させる」意識が浸透。授業改善が図られた。
- 「英語の勝山市」という気概を小学校教員と中高英語教員が共有、児童生徒にも自覚が芽生え、保護者の意識が高まり応援する雰囲気醸成されつつある。

課題

- 学習到達目標の設定は、校種間の連携を促進し、ギャップを解消する点において有効だったが、今後は、学習到達目標自体の継続した見直しが必要。
- 校種ごとに、細かな課題を精査し、改善に向けた取組を継続することが必要。

研究開発課題

- ・山梨県版CAN-DOリスト(学習到達目標)を活用して、小・中・高等学校をつなぐ系統的な指導及び目標、評価の一体化を図る。
- ・公開授業研究会の実施を推進し、取組の成果を県下に普及する。
- ・新学習指導要領を見据えた教育課程や評価の在り方を研究する。

取組内容

取組①

- ・全ての強化地域において、小・中・高等学校の外国語担当教員参加の協議会を定期的に行い、授業づくりと評価について話し合った。
- ・CAN-DOリストに基づき、全ての校種の指導内容と児童・生徒の到達度について検証し、共有した。

取組②

- ・研究校ごとに公開授業研究会を開催し、各教師の実践力を高めるとともに、研究の成果を普及した。
- ・毎年10月に「山梨県英語フォーラム」を、2月に「成果発表会」を開催し、5地区の研究の成果を共有する場とした。

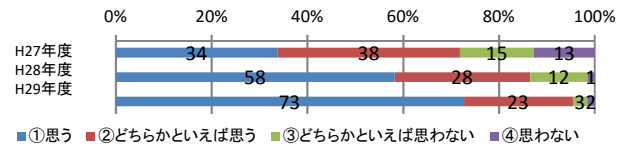
取組③

- ・めあて(目標)提示の仕方や振り返りカードを工夫し、目標、指導、評価の一体化を図った。
- ・ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を実施した。

成果①

○笛吹市においては、定期的な教師間の協議により、小・中学校の学習内容の接続が円滑に進んでいることがうかがえる。

Q 小学校で習った英語が、中学校でも役に立っていると思いますか
(笛吹市立春日居中学校)



成果②

○公開授業研究会の実施状況(山梨県全体)

平成27年度 7校 (29%) * 全24校
平成28年度 24校 (77%) * 全31校
平成29年度 31校 (100%) * 全31校

○山梨県英語フォーラムの主な内容と満足度
平成27年度:ポスターセッション 参加者237名 満足度87%
平成28年度:ラウンドビュー形式による公開授業 参加者252名 満足度93%
平成29年度:全校種に公開授業と分科会 参加者352名 満足度99%

成果③

○南アルプス市では、1学期から計画的にルーブリックを用いたパフォーマンス評価を全校種で実施した。その結果、児童の学習意欲が高まったという結果が見られる。他の研究校からも同様の声が上がっている。

☆英語の学習に肯定感を持つ、また授業に意欲的な児童生徒の割合の増加(南アルプス市)

	H27年	H29年
・英語の学習が好き	84.6	85.3
・授業に進んで参加	74.4	88.1
・小学校の授業が役立つ	85.8	93.5

研究の成果と課題

山梨県内5地域の独自性を大切にしつつ、共通して取り組むべき課題について、各校が精力的に研究に取り組んだ。小・中・高等学校すべての校種において、成果として上げられるのは、CAN-DOリストを活用し、逆向き設計の単元・授業づくりが行われるようになったことである。また、どの地区においても外国語教育を起点とした学校間の連携と授業の接続が行われたことも大きな成果である。

課題については、小学校においては、文字の読み書きについて児童がより抵抗感なく取り組めるように工夫していく必要がある。中・高等学校では、教科書の内容を活用した言語活動の設定について課題が見られる。

研究開発課題

児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するために、カリキュラムの作成や各学校・各学年のCAN-DOリストの設定と共有化、指導内容と教材開発、担任の英語力アップと指導方法の向上、効果的なTTについて研究開発を行う。

取組内容

取組①

地域で小中一貫したCAN-DOリスト
 ・CAN-DOリストによる学習到達目標があることから小学校では担任が児童に付けた力を明確にすることができている。中学校では教科担任間でCAN-DOリストにより、評価の観点が明確になっている。

取組②

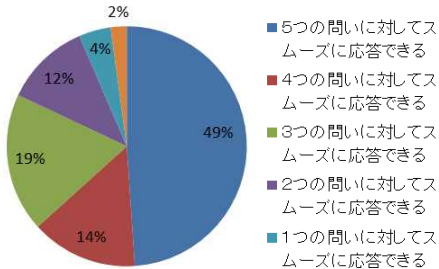
指導体制の組織化
 ・小諸市ではALTを育てるためにALTを集めて研修を行っている。
 また、TTをするための研修を担当やALTが主体となって行っている。

取組③

授業改善サイクルの確認
 ・取組②の研修で学んだことが授業で効果的に行われているかを市教委の指導主事が授業を参観して確認し、校長先生を通してコメントでフィードバックしている。

成果① 即興的性を重視したSpeaking Testの結果より

中学1年生対象の1学期末に行っているSpeaking Testでは4つ以上の問いに対してスムーズに回答できた生徒は全体の63%を占めている。また、3つ以上の問いに対してスムーズに回答できた生徒は全体の82%を占め、大多数の生徒が力を付けてきていることが分かる。



成果② 中学校1年生に対するアンケート結果

◎中学校の英語は楽しいですか。
 →96%が肯定回答

【生徒の声】

- ・ 学習の内容は変わったけれど、授業の進め方等はあまり変わっていないから。
- ・ 先生が英語で授業を進めても聞き取れるし、英語でのコミュニケーションが出来るようになってきたから。
- ・ 中学校に入ってから小学校で話していたことを書けるようになって嬉しいから。

成果③ 中学校1年生に対するアンケート結果

◎中学校の英語の授業にスムーズに馴染めましたか。→92%が肯定回答

【生徒の声】

- ・ 英語での自己紹介をみんなの前で発表できた。
- ・ 英語で数字を簡単に言えるし、読むこともできる。
- ・ お礼の言い方や謝り方など場面に応じて言えてよかった。

研究の成果と課題

小学校中学年から外国語活動、高学年で段階的に文字指導をいれたこと、中学校1年生でも英語を使って指示や説明などを行っていることから、スムーズに中学校の学習に入ることができている。中学校、高等学校における英語力の伸びの相関関係を明らかにするためにも、すでに高校で行っているGTECや英検等を中学校でも導入し、今後、授業改善と言語活動や発信能力を高める活動の工夫のための指導方法等とその効果検証について、更なる研究を行うことが望ましい。

研究開発課題

英語で伝え合うことの喜びを一層味わわせるとともに、伝える内容と使用する言語材料に深まりと多様性をもたせる系統的な英語教育の在り方～明確な目標設定・教材の開発・英語使用機会の増加・fluencyとaccuracyの伸長を図る指導と評価を通じて～

取組内容

取組① 特別の教育課程編成・実施
小学校における特別の教育課程の編成・実施

取組② 学習到達目標の設定
各学校種間のつながりを踏まえた明確な目標設定

取組③ 教材開発
発信し得る・発信しなくなる内容をもたせることに資する教材の開発

取組④ 英語使用
授業における英語の使用機会の格段の増加

取組⑤ 既習表現活用
活用を通して習得を図る指導の実施

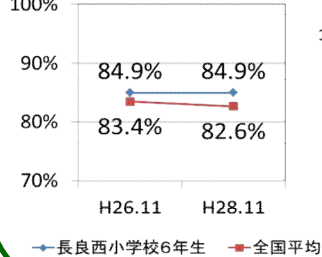
【主たる成果指標】 外部検定試験 ・ 意識調査

成果① 英語力の向上

※岐阜地区の結果から

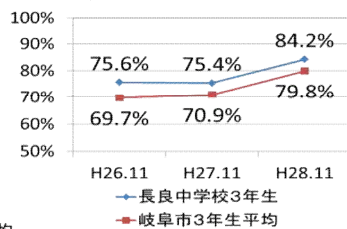
【小学校】

英検Jr.シルバーグレード平均正答率 (H26は「児童英検」)



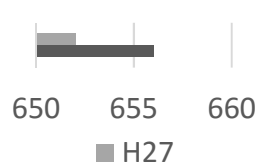
【中学校】

英検IBA 平均正答率 (H26, 27は「英語能力判定テスト」)



【高等学校】

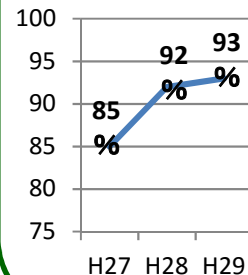
TOEFL 総合得点



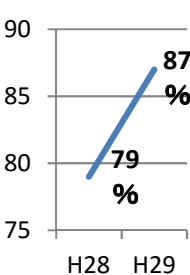
成果② 英語学習への主体性の向上

※西濃地区の結果から

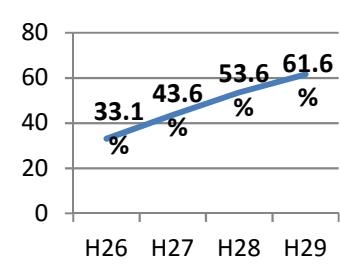
【小学校】



【中学校】



【高等学校】



既習表現を活用した発話をしている(小6・中3)

休日1時間以上英語学習(高2)

研究の成果と課題

■主な成果

英語力は、小・中・高ともに概ね向上。既習表現を活用して言語活動に取り組む児童生徒が増加。高校においては自立的な学習者が育ちつつある。
(主な要因) ・小中高等学校を通じた学習到達目標の設定により、長いスパンにおける繰り返しの英語使用を意図的に促すことができた。
・教員が積極的に英語を使用し、授業をコミュニケーションの場面とすることにより、積極的な英語使用を促すことができた。

■主な課題

小学校:「読むこと」「書くこと」における思考力・判断力・表現力の育成に資する言語活動の工夫
中学校:発達の段階に応じた言語活動高度化。Fluencyを伸長しつつ確実にaccuracyを育てる指導計画の工夫
高等学校:大学入試改革への対応(「読むこと」の指導(大量の英文を一定の時間内に読む力を育成する指導)の一層の充実等)

平成27年度～平成29年度 外国語(英語)教育強化地域拠点事業 最終報告 京都府

研究開発課題

【南丹市】児童生徒に求められる英語力と豊かなコミュニケーション力を有するグローバル人材の育成を目指した小・中・高における一貫性のある指導・評価の研究開発
 【宇治市】施設一体型小中一貫校の利点を生かした英語カリキュラムの開発、五つの領域における学習到達目標の達成状況を把握するための評価方法の開発、
 国語教育における「聞くこと」「話すこと」「話し合うこと(ことばのやり取り)」の学びを生かした英語によるコミュニケーション活動の充実

研究主題

【南丹市】豊かなコミュニケーション力を有するグローバル人材の育成
 【宇治市】多様な考えや思いを持つ相手を理解し、自分の考えを正確に伝える児童生徒の育成 ～「聞くこと」「話すこと」「ことばのやり取り」を重視して～

取組内容

取組<<小学校>>

- ・小中高を一貫した、学びをつなぐ学習到達目標(CAN-DOリスト形式)の作成。
- ・新学習指導要領の趣旨を踏まえた学級担任による外国語活動・外国語科の授業実施。
- ・第3学年国語科における「英語学習につながる」へボン式ローマ字の指導。 他

取組<<中学校>>

- ・パフォーマンステストの設定。
 ⇒単元末に生徒の目指すゴールを明記
- ・パフォーマンステストの題材の工夫。
 (1)必然性のある場面 (2)興味・関心が持てる題材 (3)教科書との関連性
- ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善。

取組<<高等学校>>

- ・中学校との接続を意識した言語活動の定着。
- ・4技能の総合的な育成を図る高度な言語活動の充実。
- ・幅広い話題について、発表・討論・交渉などを行うコミュニケーション能力・論理的思考力の育成。
- ・CAN-DOリスト形式での学習到達目標の改善と評価方法の研究。 他

成果①

英語科、外国語活動における教員の指導力が向上。
 ◆授業づくりの割合はどうか。

	一人で	専科等と	専科任せ
指導当初	40%	40%	20%
現在	80%	20%	0%

南丹市
殿田小

バックワードで単元をデザインできる教員が増え、自信をもって授業を創ることができるようになった。

成果②

児童の学習への意欲や学習内容への理解が高まった。【アンケートで肯定的に答えた児童の割合】

①英語科・外国語活動は楽しいですか。	H27 96%	→	H29 99%
②学習したことはわかりますか。	H27 96%	→	H29 93%

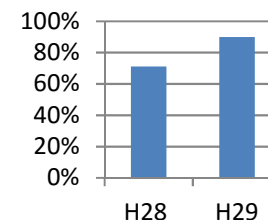
南丹市
胡麻郷小

⇒内容が高度化しても高い数値を維持。

成果③

宇治市
黄檗中

生徒の英語使用量の増加



「授業の半分以上、英語を使っている」と回答した生徒の割合

<H29.9.生徒アンケート>より

研究の成果と課題

小学校における成果は、学級担任の外国語指導力の向上があげられる。担任間・担当間や校種間連携等の密な連絡などを定例化し、ICT等を効果的に活用しながら、児童が心動かされ能動的に取り組む授業づくりができるようになった。課題は、全ての学級担任がさらに自信をもって外国語・外国語活動の授業が行えるように、今後も自律的に継続した研鑽を行っていかねばならない点である。中学校における成果は、「話すこと」「書くこと」への抵抗感が減り、積極的に英語を使おうとする生徒が増えたことがあげられる。課題は、「流暢さ」と「正確さ」とのバランスを念頭に置いた授業改善の推進である。高等学校における成果は、パフォーマンス課題への取組の充実があげられる。課題は、より「即興的」な、より「総合的」な活動を学習到達目標との兼ね合いを考えながら取り組んでいく必要がある。

研究開発課題

・グローバル化に対応した教育環境づくりを図るため、小・中・高の連携を図りながら、英語教育の系統性のある教育課程の編成及び評価の在り方について実践研究を行う。また、小学校教員を含め、英語科教職員の指導力の向上を図る。

取組内容

取組① 教育課程の編成・検証

- 小学校における担任主導による授業の実施
- 小学校におけるカリキュラムマネジメント
 - ・系統性(小～高)のあるカリキュラムの作成
 - ・中学年: 45分×週1コマ(年間35コマ)の実施
 - ・高学年: 45分×週2コマ(年間70コマ)の実施

取組② 系統性のある評価の研究

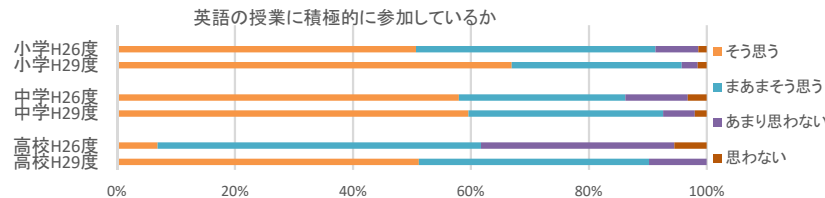
- CAN-DOリストを活用した指導と評価
- 単元毎の5領域、3観点のCAN-DOリストの作成
- パフォーマンステストの実施とフィードバックを取り入れた授業改善
- 評価基準の共有と目標の明確化
- 外部試験の実施と検証による授業改善

取組③ 教員の指導力向上

- 運営指導委員会の開催
- 全県発表会の実施
 - ・全研究校(小・中・高)の授業公開
 - ・系統性(小～高)のあるCAN-DOリストの紹介
 - ・教科化に対応した授業の在り方の周知
 - ・研究校の先進的な取組の発表

成果① 児童・生徒の英語への意識と、技能の向上

○意識調査より授業に対する積極性の推移(朝来市拠点校アンケート)



○外部試験より正答率またはスコアの推移(GTEC各種受験により考察)

	小学校(H27・H28正答率)	中学校(H28・H29スコア)	高等学校
Listening	+20%	+8.95点	+8.3点 (H28-H29)
Reading	+10%	+11.2点	+14.1点 (H28-H29)
Speaking	+8%	+13.5点	すべての項目で全国平均を上回る (H29)
Writing	+5%	+6点	+18.6点 (H28-H29)

成果② 教員の意識改革と授業改善の躍進

- コミュニケーションな授業づくりの一般化
 - ・生徒が英語を発話する授業づくり
 - ・CAN-DOリストの活用

【小学校】

- 学級担任主導による授業づくり
 - ・新観点、領域での指導と評価の試行
 - ・文字指導の定着

【中学校・高等学校】

- Students-centeredの授業づくりの一般化
- プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートを取り入れた授業づくり

成果③ 全県への普及

- 各学校種(小・中・高)の授業を公開
- コミュニケーション能力の育成の観点を取り入れた小・中・高の系統性のあるカリキュラム及びCAN-DOリストを提供

【小学校】

- ・担任主導による授業モデル
- ・「読むこと」「書くこと」の指導方法
- ・見通しをもたせた授業展開モデル

【中・高等学校】

- ・帯活動による継続的な言語活動
- ・プレゼンテーション、ディベート等を取り入れたコミュニケーションな授業

研究の成果と課題

成果としては、5領域をカバーした小学校から高等学校までの系統性のあるCAN-DOリストが作成でき、CAN-DOリストのモデルとして全県へ普及ができた。これにより、各自治体や学校における、地域や児童生徒の実情に合わせた新たなCAN-DOリスト作成が進むことが期待できる。小学校においては、「担任が英語を教える」という方向に教員の意識改革ができた。公開授業を通して、担任主導での指導モデルを示すことで、小学校教員が指導イメージを持つことができ、外国語教育を指導することに対する不安払拭の大きな一助となった。また、外国語教育推進に係る校内研修や学校組織の在り方についての研究報告により、管理職をはじめとするリーダーの支援体制についても伝えることができた。

課題としては、評価方法の研究が挙げられる。特にパフォーマンス評価において、児童・生徒に妥当性のある評価方法の確立が求められる。

研究開発課題

小・中・高等学校の各段階を通じて、グローバル化に対応できるコミュニケーション能力を育成する。
 小学校第1学年からの外国語活動型、加えて第5、6学年での教科型による英語教育を週あたり1コマ程度実施する場合の教育課程、指導法、教材、評価方法等の研究開発、小・中・高等学校における系統性のある教育課程、指導法、教材、評価方法の設定や、内容の高度化や着実な定着を実現するための指導法の研究開発を行う。

取組内容

取組①

- ・小学校でのカリキュラムマネジメント
- 1・2年 年間10単位時間
- 3・4年 35単位時間
- 5・6年 70単位時間

【45分1コマでの授業及び短時間学習による授業時数の確保】

取組②

- ・指導と評価の改善
- 小・中・高等学校で連携した年間指導計画、CAN-DOリストの開発及び活用
- 小学校の学級担任が進める楽しく学びの多い授業づくり
- 中学校、高等学校での言語活動の高度化
- パフォーマンス課題による妥当性があり児童・生徒の意欲を高める学習評価

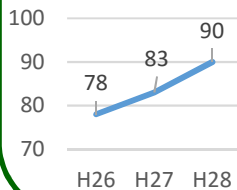
取組③

- ・小学校における指導方法等の共有
- 全ての教員が同じ授業を行えるようにするための年間指導計画、学習指導案、教材等についての地域スタンダードの作成と活用及び各校での共有体制の構築

成果① ◎児童・生徒の英語力の向上

英語能力判定テストにおいて、5級レベル以上と判定された中学1年生の割合が90%に増加。

中学校学年別生徒アンケート 結果
「～の力が付いてきている」と答えた生徒の割合(%)



	1年	2年	3年	全学年
読む力	91	89	89	87
聞く力	81	82	82	82
話す力	76	75	70	74
書く力	79	83	83	82

成果② ◎英語が好きな児童・生徒の割合の増加

	小学校 中学年	小学校 高学年	中学校
英語の授業が好き	85%	85%	69%
英語を話すことは楽しい	90%	87%	70%
外国語を使えるようになるのは大切だ	92%	95%	78%

成果③

◎小学校教員の指導力の向上
 小・中・高等学校が協力して年間指導計画や指導方法等の地域スタンダードを作成・共有

「外国語活動の指導に不安を感じる」小学校教員の割合(拠点校教員調査)
 平成27年度 85%
 → 平成29年度 15%

研究の成果と課題

小・中・高等学校で連携したCAN-DOリストの作成・活用により技能別の到達目標が明確になり、5領域のバランスがとれた授業づくりにつながった。また、CAN-DOリストを児童・生徒に示し、学習到達目標を共有することにより、英語学習への意欲が高まり、児童・生徒の英語力が向上した。パフォーマンス課題を設定した学習評価を行い、児童・生徒の英語を使ってコミュニケーションを行おうとする意識が向上した。中学校、高等学校では、ディベートやディスカッション等により言語活動を充実、高度化することで、英語で情報や考えを発信する力が向上した。これらの取組の結果、英語が好きな児童・生徒の割合が増加した。年間指導計画、学習指導案、ワークシート等を、小・中・高等学校の教員が共同で作成し、各学校の全ての教員で共有することにより、自信をもって同じ授業を行うことができるようになった。

研究開発課題

小学校英語教育の教科化と中学校・高等学校の内容の高度化に伴い、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を系統的に育成していく観点から、教育課程、指導方法、評価方法等の改善について研究開発する。

取組内容

取組①

- ・小学校3年から6年までの系統的な文字指導の実施
- ・5, 6年における、フォニックスを取り入れた文字と音の指導

取組②

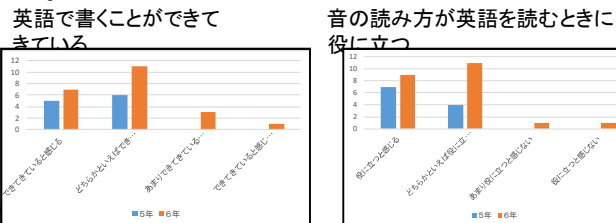
- ・小中高共通の「話すこと(やり取り)」のパフォーマンス評価表(ルーブリック)を活用した指導と評価

取組③

- ・単元のゴールとなる言語活動の工夫
 小学校…伝え合う必然性のある活動
 中学校…考えや気持ちを伝え合う活動
 高等学校…意見表出のためのリテリング活動

成果①

- ・文字を書くことができていると感じている児童が増えてきた。
- ・フォニックスを学習したことが、単語を読むことに役立っていると感じている児童が多い。



成果②

- ・ルーブリックを作成したことによって、評価に対する共通理解が進み、客観的で公平な評価ができるようになった。
- ・評価基準を児童生徒に示すことにより、学習活動への取組姿勢が意欲的になった。

成果③

- 小学校…英語を使ってコミュニケーションを図ることへの意欲が高まった。
- 中学校…タスクを基盤として考えや気持ちを伝え合う活動を行うことにより、学習意欲が向上した。
- 高等学校…教科書本文の内容を口頭で要約した上で、意見を述べる活動を工夫した結果、書くことも含めて表現の能力に向上が見られた。

研究の成果と課題

- ・文字の学習を年間通して帯活動として取り組んできて、文字に対する認識が深まりつつあると共に、5, 6年では音声から文字につなげてとらえることができている児童が見られつつある。
- ・評価をする際のルーブリックを作成したことによって、付けたい力の系統性と内容が明確になるとともに、評価の信頼性と妥当性が向上した。

研究開発課題

- 複式学級における外国語活動及び外国語科の教育課程、指導方法、評価方法並びに教員研修の在り方
- 小学校英語科と円滑に接続し、小規模学級の特色を生かして着実な定着を図る中・高等学校の教育課程等の在り方

取組内容

取組①

- 複式学級における教育課程や指導方法等の明確化
- ・各学年の具体的な教育課程及び指導方法の設定
- ・学習意欲を向上させる言語活動の工夫

取組②

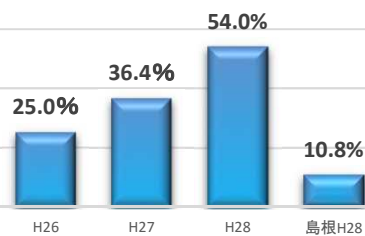
- 小・中・高等学校をつなげる「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標の設定
- ・小学校から高等学校までの言語材料や言語の使用場面の再配列
- ・目標と評価の整合性の検証と改善

取組③

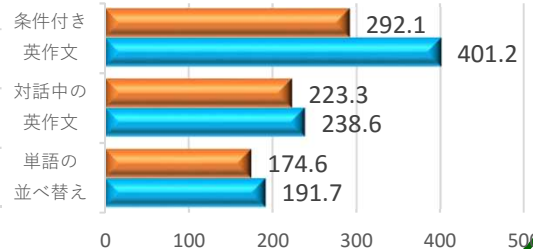
- 小・中・高等学校、地域との連携強化
- ・小・中・高等学校合同での授業研究会や研修会の開催
- ・小・中・高等学校担当者会の定期的な開催

成果① ◎児童生徒の英語力向上

英検3級取得率(中3)



島根県学力調査結果 (平成28年度1年生)



成果② ◎主体的な児童生徒の姿の実現

◎主体的な児童生徒の姿の実現 (%)

質問事項	3・4年生		5・6年生	
	吉田小	田井小	吉田小	田井小
外国人の先生や担任の先生の英語を聞くことは楽しいですか	100	100	93	100
外国人の先生や担任の先生の話している英語の意味がわかりますか	100	100	93	100
英語を話すことは楽しいですか	100	100	100	100
もっと英語を話せるようになりたいですか	100	100	100	100
外国のことに興味がありますか	100	100	100	100
英語の文字を読んでみたいですか	100	100	93	92
英語の授業をもっと増やしてほしいですか	100	100	85	84

児童英検での意識調査結果(H28年2月実施)より

研究の成果と課題

小学校では、複式学級にふさわしいカリキュラムを検討し、目的意識や相手意識を重視した活動を継続して行ったことで、「英語を話すことは楽しい」「もっと英語を話せるようになりたい」等の質問に100%の児童が肯定的に回答するなど主体的な児童の姿につながった。中学校では、相手意識と必然性のある言語活動の充実を図り、技能統合型の活動を中心とした言語活動の高度化に取り組み、県学力調査結果では、市や県の結果を大きく上回るなど生徒の英語力の向上や英語学習に対する意欲を高めることができた。高等学校では、小中との連携を通して、学びの履歴を把握した上で指導に当たることができた。高等学校卒業時に身に付けさせたい英語力を明確にすることを目標として、言語材料と言語活動を統合したプロジェクト学習への転換し、7つのグレードからなるCAN-DOリストを作成した。小中高等学校が一体となって研究を進め、上記のように大きな研究成果を得ることができたが、これらを今後どのように汎用性のあるものにしていくのか、それぞれの校種でどのように共有し継承していくのかさらなる研究が必要である。

研究開発課題

- ・小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で設定し、指導及び評価に活用する。
- ・小学校第1～4学年での活動型、第5・6学年での教科型の英語教育を実施する。
- ・発信力を育成するための指導の工夫・改善を行う。

取組内容

取組① 「CAN-DOリスト」の設定・活用

- ・小・中・高(小学校中学年～高等学校第3学年まで)を通じて一貫した学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で設定
- ・全校種において、学習指導案に「CAN-DOリスト」を位置付けるとともに、それに基づいたパフォーマンス評価を付記

取組② 小学校外国語教育の充実

- ・小学校第1～4学年 活動型
- ・小学校第5・6学年 教科型
- 70単位時間(週1コマ+短時間学習3回)
- ※短時間学習…1校時開始前15分×週3回
- 【評価】新学習指導要領に基づいた観点別評価
- 第5・6学年においては数値で評定

取組③ 発信力の育成

- ・小学校…実際に使える場面を意識した言語活動による、話す力の育成
- ・中学校…英語で授業をすることを基本とし、即興的に「やり取り」する力の育成
- ・高等学校…発信力の育成を図る言語活動の高度化

成果①

◎中学校卒業段階における英検3級以上の取得率の上昇 ※H29.12月現在 (%)

	H26年度卒 (現高3)	H27年度卒 (現高2)	H28年度卒 (現高1)	H29年度卒 (現中3)
第3学年卒業時	43.0	52.7	49.1	70.1
全国平均	34.6	36.6	36.1	—

成果②

◎実際の場面で使える英語を意識したり、コミュニケーションの場で自分の気持ち等を伝えようとしたりする児童の増加
【質問①「ふだんの生活で使ったり、使える場面を考えたりする」】または【質問②「自分のことや気持ちを英語で話している」】高学年児童の割合 (%)

	H26	H27	H28	H29
質問①	66.1	71.5	76.4	76.0
質問②	80.4	76.0	80.6	83.4

成果③

◎小学校で「教科型」を経験した中学校1年生の質的変容
・「話すこと」「聞くこと」
英語で何とか伝えようとする意欲が高い生徒が多く、入学時までに「話すこと」「聞くこと」において教室英語等の定着が図られている。
・「読むこと」「書くこと」
小学校で習得している語彙数が多いため、文字と音が結び付きやすく、「読むこと(音読)」における習得が比較的早い。また、小学校で文字が学習されるので、音声から文字への移行を円滑に図ることができるようになった。

研究の成果と課題

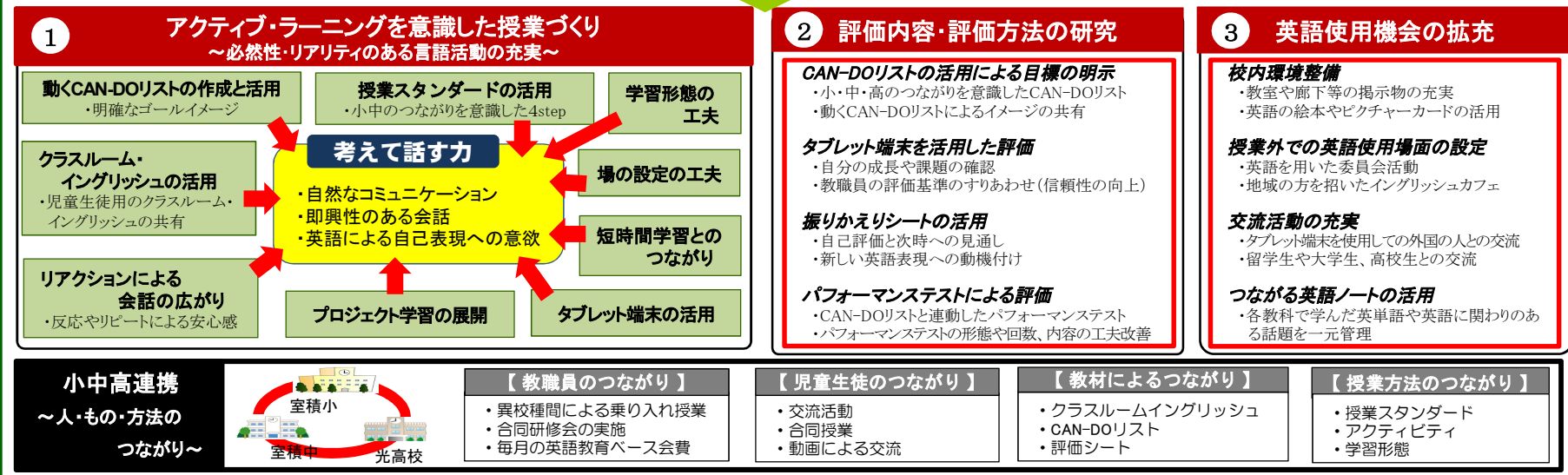
- ・「CAN-DOリスト」の設定・活用…小・中・高を通じた「CAN-DOリスト」を作成したことにより、各校種において付けたい力が明確になり、校種間及び学年間の接続を意識するようになった。また、学習指導案にパフォーマンス課題及び評価を付記したことにより、各単元の位置付けも明確になった。今後、評価の妥当性・信頼性の向上を図っていく必要がある。
- ・小学校外国語教育の充実…授業研究で協議を重ねることにより、授業で大切にしたいこと等が校内で共有化され、授業力の向上につながった。また、授業研究後に児童の授業中の姿を映像を通して協議することにより、教員の評価力が向上してきた。今後は、短時間で行える評価例等も提案できるよう、研究を進めていく必要がある。
- ・発信力の育成…校種を通して、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を大切に、発信力の育成を行った。このことにより、児童生徒が英語を実際に使う場面を意識することにつながった。また中学校では、即興的にやり取りする力が付いてきており、今後も継続的な取組を行っていく。

Synergy効果を生み出し、人・社会・未来とつながる光市の英語教育の推進

研究開発課題

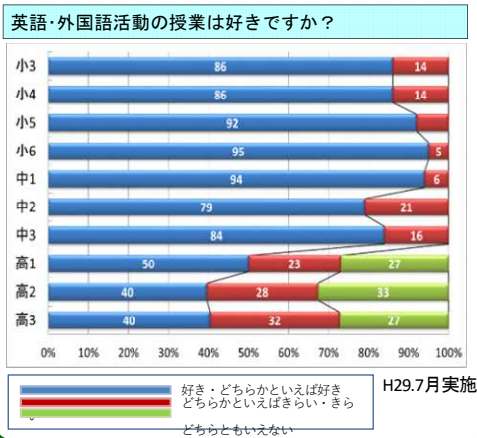
「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」に基づき、小・中・高等学校を通じて、英語を用いたコミュニケーション能力を連続的・発展的に育成するための英語教育の在り方

取組内容



成果①

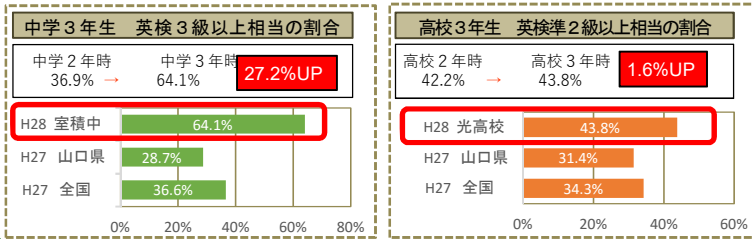
○小中学校での英語学習に対する高い学習意欲
○中学校へのスムーズな移行



成果②

○生徒の英語力が向上

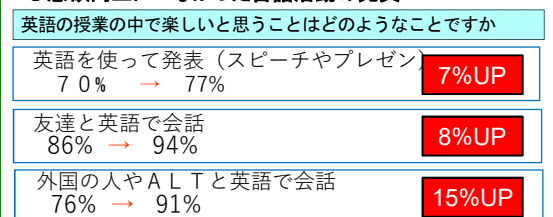
(H28.12月英検IBA調査)



成果③

○意欲向上につながった言語活動の充実

(H28.7月とH29.7月との比較)



研究の成果と課題

小・中・高における3つのつながりを意識した連携を充実させていながら、「授業づくり」や「評価」等について研究を進めてきたことで、よりスムーズな校種間の移行や高い学習意欲につながった。動くCAN-DOリストによって、目標とする姿を明確にしたり、リアクションを活用したりすることで、会話の正確さや広がりもつながっていった。また、タブレット端末を活用した外国の方との交流や、留学生との交流活動等を仕組むことで、よりリアリティのある言語活動につながり、児童生徒の意欲向上とともに、表現力の向上にもつながった。

今後は、意欲の向上だけでなく、より言語活動を正確に、そして高度にしていくために、中学校、高等学校における授業改善にも引き続き取り組んでいく必要がある。また、小学校での評価について、評価方法やパフォーマンステストによる評価の仕方など、さらに検証していく必要がある。



研究開発課題

グローバル化社会を生きるために必要な語学力や対話力を備えた豊かなコミュニケーション能力を育むため、小・中・高で連携のとれた教育環境を整え、高校までを見通した教育課程や指導方法、評価方法の研究開発を行う。

取組内容

1 内容の系統性を重視したカリキュラムの作成と指導体制の充実

- 学習内容の系統性を重視し、慣れ親しみ→活用→定着がスパイラルに機能するカリキュラムの作成
- 小1～小4で週1時間の外国語活動、高学年で週2時間の外国語科を実施(一部短時間学習を含む)
- 外部人材、他教科との連携、児童の興味関心等を生かした学級担任を中心とした単元計画と授業の実施

2 豊かなコミュニケーション能力の育成をねらう体験的な外国語教育の実施

- 「コミュニケーションの目的」「場面設定」「相手意識」を重視した体験的な外国語教育の実施
- 聞き方・話し方に関する系統的な指導計画の作成
- 聞くこと・話すことの学習内容の定着と、読むこと・話すことの慣れ親しみを関連付けた教科外国語の実施
- 「やり取り」の領域における効果的な指導方法の開発

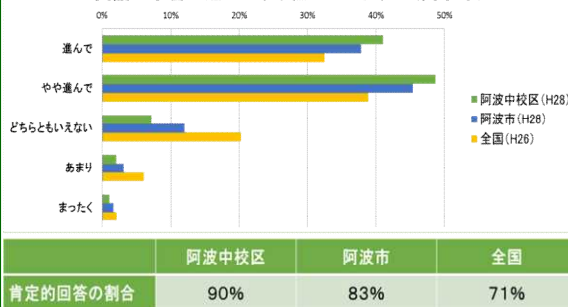
3 小中高の一貫したCAN-DO型学習到達目標の設定と学習評価のあり方についての研究

- 領域ごとに小中高一貫したCAN-DO型学習到達目標を作成
- 動画を用いた学習到達目標の共通理解等、効果的な運用方法を検討
- 数値による観点別評価(小5～)を実施

成果1

◎英語の学習に進んで取り組む児童が増えた

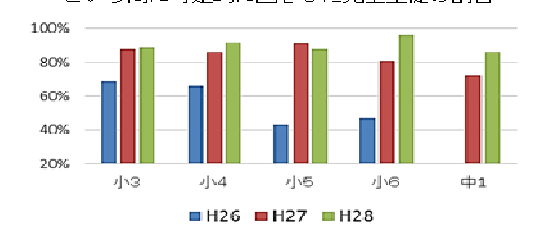
英語の学習に進んで取り組んでいますか(高学年)



成果2

◎相手を大切にしたいコミュニケーションを図ろうとする児童生徒が増えた

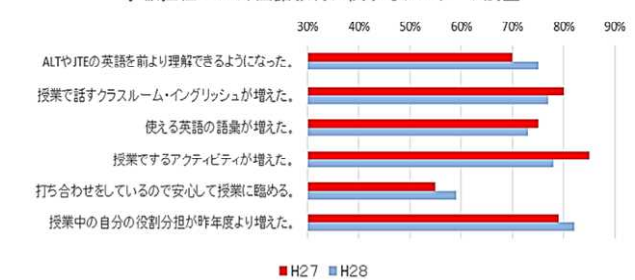
「授業中、自分や友達の良い面に気付くことがあるか」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合



成果3

◎小学校教員の授業力・英語力が向上した

学級担任への外国語教育に関するアンケート調査



研究の成果と課題

小学校低学年から内容の系統性を意識した外国語の学習を行ったこと、高学年で聞くこと・話すことの学習と関連付けて文字指導を行ったこと、また中学校1年生で小学校で行った活動を効果的に取り入れることで、小中の学びの連続性を意識した外国語教育を展開することができた。中・高等学校においては、教員の交流を通して連携を図り、英語を使って何ができるようになったかを確認することで、効率的に学習を積み重ねることができた。一方で小学校の外国語科での評価については、明確な観点別の評価規準の設定と、パフォーマンステスト等による評価方法についてさらに検証が必要である。また、小学校における外国語活動および外国語科の時数の確保の仕方について、カリキュラムマネジメントの視点から実践と検証を行い、小学校高学年で短時間学習を取り入れた場合と週2コマの外国語科を行った場合を比較し、それぞれの成果と課題を明らかにすることができた。阿波中学校区の成果を県全体へ広げ、各地域の実態に応じて、来年度から円滑な移行や先行実施が行えるように準備を進めたい。

研究開発課題

国際化時代に必要なコミュニケーション能力を育成するため、小学校低学年または中学年から外国語学習を開始した場合の各地域における教育課程、指導及び評価方法並びに中学校・高等学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

取組内容

取組① カリキュラム・マネジメント

【小学校】

新学習指導要領の趣旨に沿った教育課程の編成(時数等の確保)、目標・内容・評価の実践・研究開発

【中・高等学校】

・小学校での外国語学習を円滑に接続するため、中学校で接続カリキュラムを作成、また、中高の言語活動の高度化に向け他教科等の内容と連携

取組② 小中高一貫した目標設定

・小中高一貫した「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の作成

・目標を具現化した言語活動を設定。高等学校卒業時の言語活動をゴールとした「小・中・高の言語活動を中心とした系統表」を作成し実践・研究

取組③ 小・中・高の交流

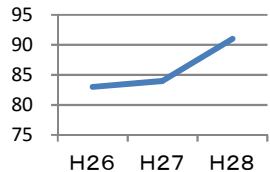
・中学校教員が定期的に小学校を訪問しT2として授業に参画

・年間1回以上高等学校教員の小・中学校での乗り入れ授業実施

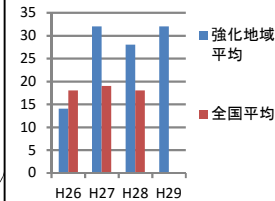
・小・中学校児童・生徒の交流授業及び中・高校生の交流授業実施

成果① 児童・生徒の英語力向上

小学校5・6年生
英検Jr. ブロンズ得点率



中学校3年
英検3級取得率



成果② 小学校で「教科型」を経験した生徒は中・高で言語活動に積極的に取り組む態度が育成できている。

・ネイティブ教員と積極的に会話し、適切に反応できるようになった。
・曖昧さへの耐性ができており、全てを理解できなくても概要や要点を捉えることができるようになった。
・初見の語句や文を見て、推測して読むようになる態度が育ってきた。

成果③

英語学習を肯定的にとらえる児童・生徒が多い
■児童生徒意識調査(3地域平均)

		平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
英語が好き	小学校	92%	92%	84%	91%
	中学校	68%	66%	75%	86%
英語が使えるようになりたい	小学校	98%	97%	94%	96%
	中学校	85%	88%	92%	96%

研究の成果と課題

拠点地域では、小学校外国語教育の早期化及び教科化に向けて、新学習指導要領の趣旨を実現するためのカリキュラム開発、「CAN-DOリスト」の作成、指導と評価の研究等を行うことで、児童・生徒の英語力及び学習意欲の向上につながったことは大きな成果であると言える。また、小・中・高等学校一貫した「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標に基づき、学校間の学びを効果的につなげるための「小・中・高の言語活動を中心とした系統表」を作成し、指導内容、指導方法の研究に取り組んだ。このような研究を重ねることによって小学校で「教科型」を経験した生徒が中・高等学校で積極的に言語活動に取り組む態度が育成されてきた。

さらに、各地域の公開授業研究会を県の新学習指導要領の趣旨を周知する悉皆としての研修に位置付けたことで、本研究の成果を県内へ広げることができたことも成果であると考えている。

一方で、新しい資質・能力の評価の在り方、方法等、特に小学校外国語科の評価については、まだまだ課題があるため、今後も引き続き研究を続けていく。また、本事業が終了した後、各校で継続して研究、実践、そして連携を続けていくことが重要であるため、県としても支援していく必要がある。

研究開発課題

- 新学習指導要領に対応する英語教育の指導方法・内容、指導体制の研究開発
- 小・中・高一貫した実践的研究

取組内容

取組①(小学校教育課程の編成)
○45分授業と関連付けた短時間学習の実施(宮若市)
○週2コマ設定のためのカリキュラム・マネジメント(那珂川町)

取組②
小・中・高一貫したCAN-DOリストの作成とそれを活用した指導・評価(技能統合型タスク活動・パフォーマンステストの実施)

取組③
小・小連携、小・中・高連携に向けた担当者会及び合同研修会の実施

成果①

【児童生徒の英語力、英語学習に対する意欲の向上】
○小学生対象の英検Jr.及び中学生対象の英検IBA等における平均正答率に伸びが見られた。
※データの詳細は両地域の報告書参照
○「英語が好き」「英語の学習が楽しい」と回答した児童生徒の割合が増加した。

成果②

【小・中・高の連携意識の向上】
○校種間のスムーズな接続に向けて、教材や学習方法の共有が図られた。
○各校種の授業実践を交流することで、児童生徒の学びの系統性を意識した授業改善が行われた。

成果③

【「何ができるようになるか」を意識した授業改善】
○小・中・高一貫したCAN-DOリストを作成したことで、各校種で目指す姿やその系統性が明らかになり、目標達成に向けた授業改善が行われた。

研究の成果と課題

○小・中・高一貫したCAN-DOリストの作成を通して、それぞれの校種の指導内容や方法を知ることができ、それが連携へとつながった。
○CAN-DOリストの作成、活用を通して、児童生徒の育成する能力や態度が明確になり、それを達成するための授業改善が行われ、児童生徒の英語力や英語学習の意欲の向上につながった。
○CAN-DOリストについては、より児童生徒の実態に即したものとなるよう、今後も定期的な見直し、修正が必要である。また、児童生徒に提示するCAN-DOリストや児童生徒によるCAN-DOリストの振り返りについては、今後も研究を深めていく必要がある。

研究開発課題

児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成を目指し、小中学校における音声と文字の計画的・系統的な指導、小中高一貫したCAN-DOリストの形での学習到達目標設定、指導・評価の在り方、及び英語教育における効果的なICTの活用の研究を通して、小中高の接続を重視した英語教育の研究開発に取り組む。

取組内容

取組①

- 小中高を通したCAN-DOリストの形での学習到達目標設定の在り方及び年間指導計画の見直し
 - ・ 「英語を用いて何ができるようになるか」の視点から到達目標を設定
 - ・ PDCAサイクルに基づいた授業改善

取組②

- 効果的なパフォーマンステストの実施及び検証
 - ・ ALTによるインタビューテスト、スピーチ、エッセイライティング等
 - ・ GTECや英語検定などの外部検定試験の活用

取組③

- 英語の「生活化」を目指した環境づくりの充実
 - ・ ICTを効果的に活用した授業づくり
 - ・ 自分の住んでいる地域紹介

成果①

- 小中高が連携してCAN-DOリストの形式での学習到達目標を設定したことにより、「英語を使って何ができるようになるか」の視点から、目指す児童生徒像の共有化を図ることができた。
- 短時間学習に関する年間指導計画（小学校）を見直し、一単位時間の学習と短時間学習の関連について研究を深めることができた。

成果②

- 「生徒が英語を用いて何ができるようになるか」という視点から、パフォーマンステストを定期的実施することにより、指導と評価の一体化を図ることができた。
- GTECや英検などの外部検定試験を活用し、結果の経年比較（同一学年、同一集団）を行うことにより、生徒のコミュニケーション能力を客観的に把握するとともに、課題を踏まえた授業改善につなげることができた。

成果③

- 「ICT活用による遠隔授業（小学校）の実施」「町主催の英語キャンプ（小中学生）の実施」など、実際に英語を使用する場の拡充により、児童生徒の「英語を使おうとする意識や意欲」が高まった。
- 高森町の紹介（小中学生）をしたり、「高森町ガイドブック【英語版】（高校生）の作成」により、自分の住んでいる地域のことを英語で発信することができた。

研究の成果と課題

CAN-DOリストの構築により小中高全体を見通した英語のカリキュラムの改善につなげることができた。また、児童が英語や外国の文化に触れる機会を多く設定したことや効果的なパフォーマンステストの設定により、児童生徒の外国や英語への興味・関心が高まった。授業における指導の工夫、県が独自に開発した教材の活用、4技能を統合的に組み合わせた授業の展開等により、外部検定試験の合格率が向上し、児童生徒の英語力が高まった。今後、児童生徒のコミュニケーション能力及び教員の英語力・指導力の向上を図る必要がある。また、小中高の円滑な接続に向けて、さらなる連携強化を図る必要がある。

研究開発課題

- ・ 小学校における英語教育の「早期化」「教科化」に対応するための授業時数確保の工夫及び指導目標・内容・計画の研究開発
- ・ 小・中・高一貫したCAN-DOリスト(学習到達目標)を活用した指導と評価の改善による児童生徒の英語力・コミュニケーション能力の向上

取組内容

取組①【小学校でのカリキュラム・マネジメント】

- 中学年・35単位時間(週1コマ45分)
 - ・ 活動型:「話す」「聞く」の音声中心の指導
- 高学年・70単位時間(45分のみ、短時間活用)
 - ・ 教科型: 音声+初歩的な文字の指導
 - ・ 単元計画に沿った短時間学習, 補充的短時間学習の計画と実施

取組②【小・中・高一貫したCAN-DOリストを活用した指導と評価】

- 接続に配慮したリストの作成と共通理解・共通実践
- パフォーマンス・テストや振り返りカードの活用や作品の蓄積による評価
- PDCAサイクルに基づく授業改善

取組③【小・中・高における表現力向上のための言語活動の工夫】

- 褒め言葉やあいづち, 聞き返しなど会話の継続に有効な表現の導入
- 小・中通じての地域教材の活用
- 小・中・高におけるShow & Tell, スピーチ, プレゼンテーションの実施

成果①

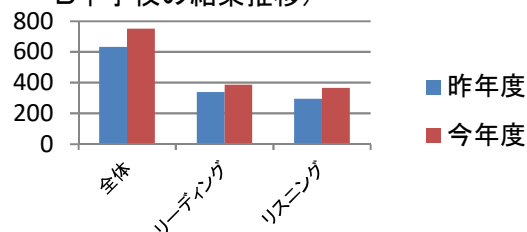
- 英語学習を肯定的に捉える児童生徒の増加(下表: 拠点地域A全小5・6年生対象アンケート)

	H.28	H.29	増減
英語が好き	81%	84%	+3
授業に進んで参加	91%	93%	+2
授業内容がわかる	90%	91%	+1

- 自発的な英語発話量の増加
- 文字学習への抵抗感減少と定着度の向上

成果②

- 児童が到達すべき姿と実態を照らし合わせながらの指導方法改善の実現
- 中学生, 高校生の英語力向上(英検IBA結果より, 下表は拠点地域B中学校の結果推移)



成果③

- 自信を持って, 意欲的にコミュニケーションや言語活動に臨む児童生徒の増加(授業の姿やパフォーマンステストの姿から)
- よりよい人間関係づくりができた実感する児童の増加
- スピーチ大会やディベート大会等に積極的に参加する中学生の増加
- 英語による「自己表現」や「他者との対話」への意欲を示す高校生の増加

研究の成果と課題

- 小学校中学年の外国語活動, 高学年の教科型学習が新学習指導要領の標準に準じて導入され, 地域教材や新教材等を活用した授業が, ほぼオールイングリッシュで実施されるようになったことにより, 伝え合う楽しさを味わいながら生き生きとコミュニケーションに臨む児童生徒の姿が実現されている。
- 小・中・高一貫したCAN-DOリストを作成し活用した指導が行われたことにより, 中学校や高校での言語活動が工夫・充実され, 英語力の向上につながっている。
- 小・中・高での研究体制が整い, 小中高連携や小小連携を図りながらPDCAサイクルに基づく授業改善と共通実践が行われたことにより, 拠点地域の小学校における英検Jr.の正答率がほぼ同程度となるなど, どの学校にも等しく英語力が育成され, 小・中・高のスムーズな接続につながっている。
- 小小連携に比べ異校種間の連携は時間の確保等に難しさがあったが, 今後も工夫しながら連携を図り10年間の系統性に考慮した指導計画の完成を目指す。

研究開発課題

小中高を通じた新たな英語教育に向けて、生涯にわたり4技能を積極的に使えるようになる英語力育成を目指し、小中高一貫したCAN-DOリストの目標設定による評価と授業づくりを柱とし、英語教育の研究開発に取り組む。

取組内容

取組① 小学校でのカリキュラム・マネジメント

- ・3・4年生・・・週1コマ45分の授業
【活動型、「聞く」「話す」音声中心】
- ・5・6年生・・・①45分授業(年間70時間) ②45分授業(年間56時間)+短時間学習15分(年間14時間)
【教科型、「話す」「聞く」+初歩的な「読む」「書く」】

取組② 小中高一貫したCAN-DOリストを活用した指導・評価

- ・単元や学年ごとの学習到達目標や必要性・必然性のある言語活動を明確にした授業改善
- ・小学校での学習評価の研究(評価の観点、評価方法等)

取組③ 生徒の客観的な英語力の把握

- ・外部試験の実施(英検、GTEC、英検IBA)
- ・パフォーマンステスト

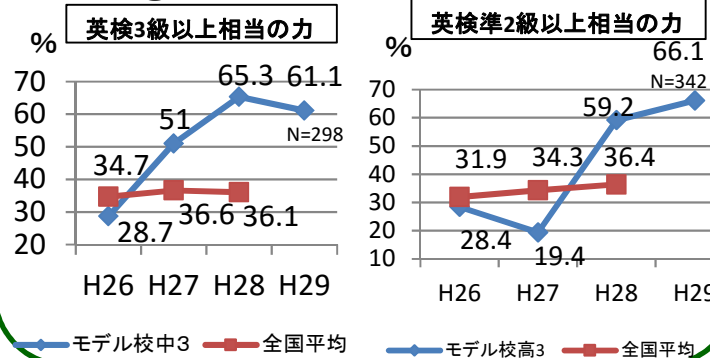
成果① ◎英語学習を肯定的に捉える児童生徒が増加

◆「英語の授業が好き」「どちらかと言えば好き」と回答した児童生徒の割合(%)

	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
H27	92.2	87.9	89.7	72.2	82.8	51.7	51.9	
H28	90.2	96.1	84.3	79.2	67.5	63.2	67.5	46.1
H29	94.9	89.8	85.6	83.6	77.7	50.6	73.2	66.3

モデル校3小学校、1中学校、1高校の児童生徒対象にアンケートを実施

成果② ◎中学生、高校生共に英語力が向上。



成果③ ◎小学校で「教科型」を経験した中学校1年生は、小学校から中学校への学びの連携がスムーズである割合が高い。

◎小学校で「教科型」を経験した中学校1年生は、小学校から中学校への学びの連携がスムーズである割合が高い。

小学校での英語学習が役に立っていると思う(N=291)

	H26.7月	H27.7月	H28.7月	H29.7月
	56.8%	80.1%	80.7%	83.5%

・アルファベットの文字を書き慣れている。また小学校で学んだ曜日や日付けを、英語で読んだり書いたりすることができる
モデル校の中学校1年生について、小学校6年生で「教科型」を経験した生徒対象のアンケートを実施

研究の成果と課題

小学校中学年から外国語活動、高学年でそれにプラスして文字に慣れ親しませ、また中学校で小学校での活動や学び方を継続して行ったり、教材や人をつないだりすることで、スムーズな小中接続を図ることができた。小学校においては、ALTを効果的に活用しながら、学級担任による指導がスムーズに行えるようになってきた。小学校外国語科での評価については、今後もCAN-DOリストの整備とそれに合わせた評価方法について、また、パフォーマンステストや英語クイズ等による評価の検証が必要である。ICT教材についても、各校種で効果的な活用方法について研究し、中高ではウォームアップでの活動等、共通実践を進めたことで、生徒の英語使用機会を増やすことができた。その結果、モデル校では英検IBAでも国の求める英語力を上回ると共に、英検取得率も伸び率が高くなった(H29:中3・3級50%、高3・準2級34%)。高等学校においては、教員の小中高を意識した言語活動、発信能力を高める指導方法の改善に伴い、生徒の授業に対する意識も高まった。

研究開発課題

各区分や学びの時期における目標やつきたい力を設定し、系統性を持った内容をスパイラル状に学習する。

取組内容

取組①

- ・小中高をつなぐカリキュラムの検討
- ・小中高共通のテーマを設定
- ・校種を超えてスパイラルに学習
- ・異校種間の交流を図り、授業力向上を図る。
- ・他教科や学校行事との連携

取組②

- ・英語教育推進委員会の設置
- 定期的な小中高の英語推進委員が会議を持ち、縦の繋がりをもつ系統性のあるカリキュラムの構築やCAN DOリストを作成したり、共通理解・情報交換を行ったりした。

取組③

- ・運営指導委員会の設置
- 外部大学より学識者に来校していただき、会議を持ったり、定期的に授業を参観してもらうなどして、授業改善に向けて指導
- ・助言をいただき、研修を行った。

成果①

- ・小中高それぞれにおいて、自己・人物紹介・夢(生き方)・京都・環境・学校・日本文化を共通テーマとして、各段階に応じた学習形態で授業展開ができた。
- ・小中高と系統立ったテーマのもとで一貫した言語活動が行われ、効果的に異校種間の連携ができた。
- ・国語科・社会科・家庭科の授業と連携したり、修学旅行や留学生徒との交流などで英語で自分の思いや考えを発信したりするなどの場を設けた。また年に1回、海外へ行った生徒たちからの報告会を全校生徒に向けて行っている。

成果②

- ・小中高を繋ぐCAN DOリストにより、児童生徒に何ができるようになるかを明確にし、生徒が学習に対する見直しをもつことができるようになってきた。
- ・小中高の教員が一緒になって本学園の英語教育を構築することができてきた。
- ・教員交流が活性化するとともに、小中・中高の生徒交流も活性化してきた。年数回、校種を超えた交流授業を実施している。

成果③

- ・各教員が自身の授業の在り方を見直し、授業改善を行った。ペア・グループ学習を取り入れ、発信力の強化に努めた。評価においても、パフォーマンステストを取り入れ、日常の言語活動が活性化し、児童生徒の積極的な取組につながった。
- ・研修会にも積極的に参加するなど、教師自身の変容が見られ、それが生徒の変容へとつながり、授業力の向上に結びついた。

研究の成果と課題

小中高とも教職員の英語教育における共通理解と協力体制が構築された。事業を受けて光華女子学園全体が組織的な英語改革に取り組んでおり、光華独自の英語教育構築と環境整備ができてきた。教員の意識が変わり、積極的に研修会へ参加し、指導者としての意識向上と授業改善が進んだ。今後も小中高が協働して次期学習指導要領に向けた英語教育を継続的に進めていくことが必要である。

研究開発課題

小・中・高等学校の一貫した英語教育目標を見通した継続的・系統的教育課程の研究開発と
グローバル人材に求められる英語によるコミュニケーション能力の育成

取組内容

取組① 小学校でのカリキュラム開発

- ・小学校3・4年生:週1コマ45分の活動型授業
(「話す」「聞く」の音声指導中心)
- ・小学校5・6年生:週2コマ45分の教科型授業
(「話す」「聞く」の初歩の定着と「読む」「書く」への慣れ親しみ)

取組② 小・中・高一貫した学習到達度目標を活用した指導・評価

- ・小学校5・6年生:【接続期1】
(学習到達度目標(CAN-DO形式)に基づいたカリキュラムと評価の開発)
- ・中学校1年生:【接続期2】(5領域の基礎的指導)
- ・中学校2・3年生: 知識と運用(5領域の運用能力の指導)
- ・高等学校:学習到達度目標(CAN-DO形式)と外部試験を踏まえた
高度な英語運用能力(例:プレゼンテーション能力)の指導

成果① 小中接続の取組の成果の向上

- ・小学5・6年で、話せる語彙や表現が増える等、初歩的な会話能力が身に付いてきた。
 - ・小学5・6年で、英語の仕組みや「読むこと・書くこと」に興味を持って学習する児童が増えた。
 - ・小学校5、6年生で英語を教科として学んできた中学1年生の語彙・構文に対する意識の向上が顕著に見られた。
 - ・小学校への乗り入れ授業を実施したり、パフォーマンステストやそのフィードバックを継続したりすることで、中学校の英語学習への接続がスムーズになり、英語でコミュニケーションを図ろうとする態度や意欲が向上した。
 - ・言葉だけでなく、視線や身振り、表情などで伝えよう、理解しようとする姿勢が身に付いてきた。
- ※ 小学校教員対象アンケート(H28.7月実施)
中学校生徒対象実態調査(H29.7月実施)

成果② 英語学習への肯定的態度の向上

◆「英語を使えるようになりたい」と答えた
児童生徒の割合(%)

	小5	小6	中1	中2	中3
28年度	93.1	92.5	98.7	95.8	92.4
29年度	95.7	88.0	96.4	95.3	97.5

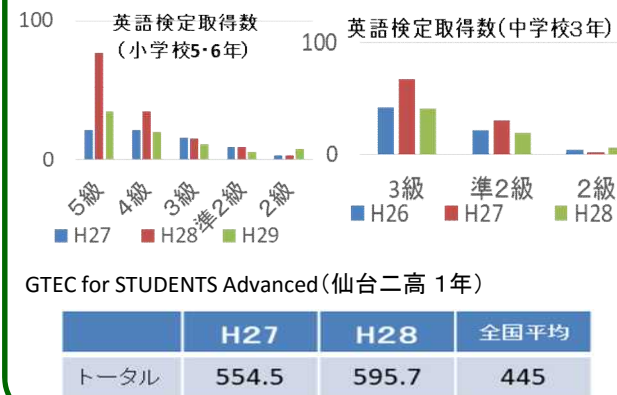
※児童対象アンケート(H29.6月実施、)生徒対象アンケート(H29.7月実施)

◆English Caféの総利用者数(宮城第一高)

	開催日	参加者(延べ)
27年度	月・木 21回	164名
28年度	月・木 33回	204名
29年度(11月現在)	月のみ 11回	78名

※ English Café:「放課後英会話の時間」をコンセプトに行う、宮教大海外研修生との1～1.5hの英会話レッスン

成果③ 児童生徒の英語力の向上



研究の成果と課題

小・中・高一貫した学習到達目標(CAN-DO形式)のもと、小学校低学年より17時間の英語活動に親しみ、3・4年で外国語活動を35時間、5・6年で教科型の英語学習を70時間と段階的にカリキュラムを設定したことで、児童の英語学習への意欲が向上した。また、小学校3・4年から5・6年(【接続期1】)において、ローマ字や、アルファベットの音と文字とを関連させた指導を取り入れるなど、英語の読み・書きへの興味を高めながら教科としての学習に移行することができた。中学校1年(【接続期2】)でも同様に、中学校入学後にスタートアップカリキュラムを設定することで、中学校からの学習への導入がスムーズになった。小中ともに、英語の授業を好意的に捉える児童生徒は7割を超えるが、一方で、その数は少しずつ低下している。英語学習への苦手意識、学習観の変容、及び学習者の認知能力と教材内容のミスマッチなどが原因として考えられる。また、小学校、中学校ともに、パフォーマンステストや外部試験を活用した客観的な評価の在り方については課題が残る。高等学校においては、高度な英語運用能力を身に付けさせるという観点から小・中学校の指導方法について情報交換を行ってきた。また、外部試験の追跡調査を行い、5領域間の能力の分析や他教科との関係から、生徒に合わせた段階的な指導を試みた。これまでの評価と技能別の評価の違いが見えたことが大きな成果であるが、5領域のバランスや適時に指導する方法の在り方は検討の余地を残している。今後も児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を様々な方法で測りながら情報交換と分析を重ねていくことが必要である。

研究開発課題

グローバル化に対応し、小学校から高等学校まで系統的な英語カリキュラムを開発し、海外に通用する英語表現力並びに英語コミュニケーション能力を育成する。

取組内容

取組①(小学校)

- 外国語活動・外国語科の新設【すべて1コマ45分】
1～4年生・・・外国語活動【「話す」「聞く」中心・低週1、中週2】
5・6年生・・・外国語科【初歩的な「読む」「書く」を含む、週2】
- 新規独自教材の開発・新教材「We Can!」の実践
1～4年生:「Hi, friends!」をベースとした独自教材の開発。
5・6年生:新教材「We Can!」を加味した単元の開発。
- 外国語科における評価の在り方の検討
・ペーパーテスト ・ALTとの個別面接 ・パフォーマンス評価

取組②(中学校)

- インプット・アウトプット活動の工夫
多様な視聴覚教材・TPR・ラウンド制・ペアワーク・グループワークを用いた生徒の意欲を高める楽しい授業
- 即興的なスピーキング力・ライティング力の向上に向けた工夫
アクティブ・ラーニングを用いての全員参加の意欲を高める授業
- 検定教科書の徹底的な活用と多様な読解教材を用いた思考力を高める授業
多様な音読、Q&A、サマリー、思考力を高める発問の工夫を行う授業

取組③(高等学校)

身近な話題に関して自分の考えや意見が、学習した語彙や文法を用いて一定程度論理的に主張できるような場面を授業内に設け、英語授業の更なる高度化をすすめる。また、文系クラスを中心に、グローバル人材の育成につながるための授業を展開する。加えて、ALTとのTeam Teachingを通して、フォーカス・オン・フォームの視点から使用場面に応じて英語表現を使い分けられる力の育成を図る。

成果①(小学校)

○外部試験において、全国平均より高い平均値が示された
全ての実施期において、学年を経るごとに全国平均より高くなっており、また学習経験が多くなるほど、得点率が高くなっている。学習の定着が一定なされており、また学習の高度化により児童の英語習得が一定保証されていることが理解される。

SILVER		3年	4年	5年	6年
H28.2	平均点	80.75	83.01	86.84	89.27
	差	(+1.75)	(+1.01)	(+3.84)	(+4.27)
H29.2	平均点	77.78	82.96	84.85	90.35
	差	(- 3.22)	(- 2.04)	(+0.85)	(+7.35)
H29.12	平均点	78.00	86.07	88.07	89.04
	差	(- 5.00)	(+1.07)	(+2.07)	(+4.04)

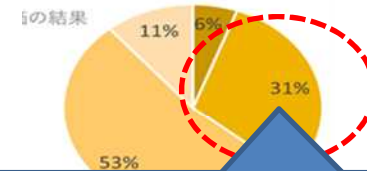
成果②(中学校)

○中3生38%が英検準2級以上72%が英検3級以上を取得(準1級以上は帰国生を含む)
平成29年12月現在
実用英語技能検定取得率

	第1学年	第2学年	第3学年	全校生徒
1級	0.0%	0.7%	3.7%	1.5%
準1級	0.7%	3.1%	3.0%	2.5%
2級	3.0%	3.9%	3.0%	3.3%
準2級	3.0%	3.1%	27.8%	11.5%
3級	7.7%	18.2%	34.5%	20.0%
4級	20.6%	23.8%	8.2%	16.6%
5級	15.2%	11.1%	3.7%	9.4%

成果③(高等学校)

CEFR指標での生徒の英語力調査結果



B1B2レベルの生徒が37%
(グローバル関連授業受講生のみ)

研究の成果と課題

小中校の一貫した学習到達目標を設定し、各校種でさらに詳細なCan-Do指標を使った授業実践の取り組み等、4年間の外国語教育の高度化をめざした研究・授業改善が、児童・生徒の4技能(5領域)の向上に影響を及ぼしたことがわかる。また、学習に取り組む姿勢や学習意欲についても高い数値を示している。今後も彼らの意欲が続くよう、小中接続や中高接続を大切に、教材等の連携とともに指導者間の連携を密にとり続けていくことが大切にならなくてはならない。また、外国語教育高度化の取り組みを受けた児童生徒が中学校・高等学校へ入学していくことを踏まえ、彼らの英語への意欲関心を継続させ、力を高めていく指導を探究し続けていかねばならない。そのためには、評価の方法やその結果をいかに次校種に引き継いでいくかをさらに検討し、児童・生徒一人一人の力を着実に見取り、英語力の向上を目指していけるような小・中・高等学校の連携の在り方を今後も模索していく必要がある。

研究開発課題

* 新学習指導要領を踏まえた下記2項目に留意するという5言語共通の方針のもとに単元指導案を作成し、実践する。

A:学力の3観点(「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう態度」)

B:指導目標の5領域(「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」)

取組内容

取組①

単元目標として様々なパフォーマンス課題を設定し、これを実現させるために授業の逆向き設計を行う。

取組②-1

単元を通じて養われるべき力を、学力3観点別の目標として明確化する。

取組②-2

「知識・技能」観点について、既習事項の整理、CAN-DOリストの活用により効果的な習得をめざす。

取組③

単元を通じて、5領域の力が総合的に養われるように、授業をデザインする。

成果①

「自分の関心のある人」、「進路・将来の夢を語る」などのプレゼン、「道案内」、「学校案内」、「買い物」などのタスクのパフォーマンス課題を、生徒が自分自身にとって意味のあるテーマととらえ、意欲的に取り組んだことが、教師の観察から明らかとなった。

成果②

目標の明確化により、聴衆・相手を意識したプレゼン発表やタスク達成、進路意識の深化および進路実現、さらには自己肯定感の確認、今後の学習意欲の向上につなげることができたことが、生徒の感想などから明らかとなった。

成果②-2

課題の達成に既習事項を活用する生徒も見られたが、必ずしも十分ではなかった。Can-doリストは韓国語指導案作成にあたって試験的に参照した。

成果③

原稿作成により「書く」力、プレゼン発表により「話す(発表)」力、および他者の発表を「聞く」力を一定養うことができたが、質疑は日本語に頼りがちなケースもあり、「話す(やり取り)」力の育成については、必ずしも十分ではなかったことが生徒の感想などから明らかとなった。

研究の成果と課題

「自分の関心のある人」、「進路・将来の夢を語る」などのプレゼン、「道案内」、「学校案内」、「買い物」などのタスクのパフォーマンス課題を、生徒が自分自身にとって意味のあるテーマととらえ、意欲的に取り組むことができた。3観点別に目標を明確化することにより、聴衆・相手を意識したプレゼン発表やタスク達成、進路意識の深化および進路実現、さらには自己肯定感の確認、今後の学習意欲の向上につなげることができた。一方、既習事項の参照は部分的であり、CAN-DOリストは授業計画作成にあたって試験的に参照したにとどまるなどの課題が残ったので、活用方法を検討したい。また、原稿作成により「書く」力、プレゼン発表により「話す(発表)」力、および他者の発表を「聞く」力を一定養うことができたが、発表に関する質疑は日本語に頼りがちなケースもあり、「話す(やり取り)」力の育成については、今後の課題である。効果的なスクリーンディングが必要であろう。

今回は、いずれの言語も、単数または少数の単元での実施であったが、今後は複数の単元、複数の学年でもパフォーマンス課題を目標とする単元指導案を作成し実践を試み、その成果を年間授業計画にどのように反映できるのか検討していきたい。また、英語教育における先進事例や新しい教育手法について研究をすすめる、その成果を本事業に反映していきたい。

研究開発課題

中学校・高等学校を対象とした「フランス語の学習指針」策定
 -アクティブ・ラーニングを取り入れた外国語活動の効果検証-

取組内容

取組①

・「フランス語の学習指針」策定

外国語を学ぶ意義、当指針の位置付け、指導案、コミュニケーション能力指標、ルーブリック評価を盛り込む冊子の作成ならびに配布予定(年度末までに)。

取組②

・異なる研究校における、自主性・協働性を重視したアクティブ・ラーニングの試行
 科目の位置づけや授業形態が大きく異なる各校において、当該研究で重視する学習指導案の考案、実施、検証、改定。

取組③

・グローバル市民育成を視野に入れた異文化理解を深める外国語教育法の模索
 各種指導案に異文化的気づきを促す活動を実施し、生徒による省察およびアンケート結果から効果を検証。

成果①

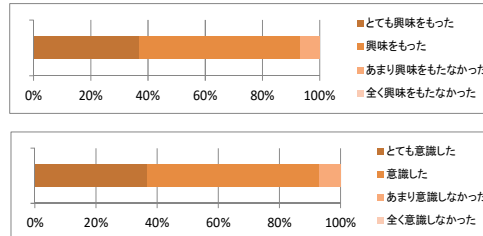
・16のテーマに応じたコミュニケーション能力指標(暫定版)の完成、ならびに当指標の利用法の提示。
 ・指導者にも生徒にも「指針」となる具体的な指導内容、学習活動内容の提示が実現。

成果②

・(初学者に対して)自主性・協働性を重視したアクティブ・ラーニングを実施し、その効果が確認できた。
 ・フランス語(英語以外の外国語)の授業形態が学校によって異なるものの、年に数コマ程度の導入・実践の可能性が把握できた。

成果③

・共生に必要な異文化理解に留まらず、自国文化への意識も高まる効果を得ることができた。



9割近い生徒が、異文化について興味を持ったと同時に、今回の活動や学びを通じて自国文化との差異を意識した。

【自己評価アンケートの結果より】

研究の成果と課題

事業全体としては「指針」の策定、各校における自主性ならびに協働性を重視した学習活動案の提示、さらにはグローバル市民育成を視野に入れた、異文化理解を深める外国語教育法の具体案の提示ができ、調査を通じて、生徒の異文化理解のみならず自国文化に対する意識も高まるという効果が確認された。また、各研究校との連携を通じ、現場では予想以上に英語以外の外国語の重要性が認識されていることが分かった。加えて、初修外国語を教える際、知的水準の高い高校生に対する授業を展開する必要があるものの、言語技術的には限られるため、「英語に準ずる」指導では適さないことを、事業を通じて再認識した。フランス語(英語以外の外国語)を開講している学校関係者だけでなく、各都道府県教育委員会との連携の必要性が欠かせないという理解も事業を通じて得られた。

研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

取組内容

取組① 地域貢献を目指すプロジェクト学習の指導案・評価法を作成、ロシアからの訪問団との交流会に向け、学校紹介や各種イベント等与えられた課題を達成するための準備活動、当日の課題達成、事後にロシア側生徒とSNSやカード交換で取り組みをさらに発展。

取組② ロシア人高校生へのわが町紹介という取り組みに向け、指導案、評価法を作成。取り組みを展望した授業活動を通じて、5技能の総合的な育成と評価を実現。また実際の交流後にICTの活用により、双方向的な意見交換を行う授業を実施。文章構成から発表までをルーブリック形式で評価。

取組③ 2020年の東京オリ・パラ開催時ロシア語ボランティア活動実施に向け、地域内教育機関(小・中・高・大)の横断的連携構築の第1歩として、ロシア人を交えた機関合同交流会を企画・運営。実施に向け文化比較を踏まえた自律的調査活動、表現練習などのグループワーク活動を展開。

取組④ ロシア人訪問団に対する富山県の見所・魅力紹介、文化体験イベント実施等の取り組みに向け、指導案と評価ルーブリックを作成。発表に向けた原稿作成・プレゼン練習等、5技能を使った授業活動を展開。実際の交流会での取組実施。富山大学生との交流会を実施、卒業後のロシア語学習の展望を生徒に理解させる。

成果① ◎生徒のロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力の向上

必要なりテラシーを重視した内容に学習を絞り込み、具体的な課題状況を作ることで、生徒のロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力が向上し、また実践を通してそれらを創造的に使用する力を養うことができた。

	満点	平均点
日本語原稿の内容	10	7.4
原稿の露訳	20	12.8
ルーブリック評価(講師による評価)	24	19
夏休みについての作文	10	7.5

成果② ◎生徒のロシア語学習意欲・学習に対する有能性が向上

地域連携・異文化交流等の課題達成型授業活動の展開及び協働作業により、生徒の学習意欲・学習に対する有能性が向上した。

★ロシア語に対する自信はあるか？

	ある	ややある	どちらとも言えない	あまりない	ない
取組実施前	0名	1名	0名	3名	1名
取組実施後	1名	3名	0名	1名	0名

★今回の交流会を機にロシア語学習へのモチベーションはあがったか？★
YES:11人、NO:1人

成果③ ◎教育機関の縦の連携により学習の長期的展望を生徒が実感

中・高・大等の教育機関の縦の連携により、学習の長期的展望を生徒が実感し、また各機関の生徒やさらには地域住民に対し、多言語・多文化に対する関心・理解を高めるきっかけを作ることができた。

◇高校を卒業してもロシア語の勉強を続けたいという生徒の割合◇

現1年生	現2年生	現3年生
77%	70%	60%

研究の成果と課題

地域連携・異文化交流事業などを授業に積極的に取り入れることを目標に、それに向けた課題達成型授業活動の指導案・評価法を確立した。それらの指導案に基づく授業活動を展開する過程で、必要なりテラシーを重視した内容に学習を絞り込み、具体的な課題状況を作ることで、生徒の自律的な学習活動が格段に進み、言語表現習得においても構造・意味により深い関心を持って臨む態度が養われ、全般的ロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力が向上した。また実際にイベントを協働作業で企画運営、実施する中で、生徒の学習意欲・学習に対する有能性が向上した。ルーブリックを用いた評価を取り入れたことで、教師と生徒が課題のどの点に注意すべきかを共有しながら、授業活動を組み立て進めることができた。プロジェクトベースの授業計画、指導案作りがなされたが、今後、5領域の言語活動がどのような配分でなされるべきか、どのような言語材料を使用するか等の細部について検討の必要がある。評価については、学習者自身の自己評価と教師からのフィードバックなどの積み重ねによる継続的評価システムを作り上げるまでには至っておらず、また準備段階の評価方法、発表の評価についてはさらに検証が必要である。